

## オルドス・モンゴルの祖先祭祀

——末子トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連を中心に——

楊 海 英\*

### The Ritual of Ancestor Worship among the Ordus Mongols

Haiying YANG

The ritual of worshipping Toloï Eĵen, the youngest child of Cinggis Qaan, had been maintained in the Ordus region in Inner Mongolia until 1956. In Mongolian society, based on ultimogeniture, the youngest child is considered to be “the son who keeps the furnace and fire” and inherits all the property from his forefathers. At the same time, the youngest child is under an obligation to perform rituals to worship his family’s ancestors.

In the Ordus region, the ritual clan, which administers the ancestral ritual for the youngest son, Toloï Eĵen, is called “*darqad*”. The *darqad* usually worship Toloï Eĵen, but they also worship the successive ancestors of the Cinggis Qaan family, on behalf of Toloï Eĵen. The ritual in which Cinggis Qaan’s ancestors are worshipped is administered by the same *darqad*, the ritual clan worshipping Toloï Eĵen, and these rituals are called *yiril-un tayily-a*.

This paper will focus on the Toloï Eĵen ritual during the era of the late Ching dynasty and the early Republic of China, and analyse historical documents. Analysis will also be made of the social structure of the ritual clan, the *darqad*, which had been administering the Toloï Eĵen ritual, mainly on the basis of data and materials obtained through the field work of the writer. Following that, the actual state of the Toloï Eĵen ritual is described and particularly, the connection between the Toloï Eĵen ritual and *yiril-un tayily-a* will be analyzed. By this, the

---

\* 関西外国語大学，国立民族学博物館共同研究員

**Key Words** : the youngest son, Toloï Eĵen, *yiril-un tayily-a*, ancestor worship rituals, Ordus Mongols

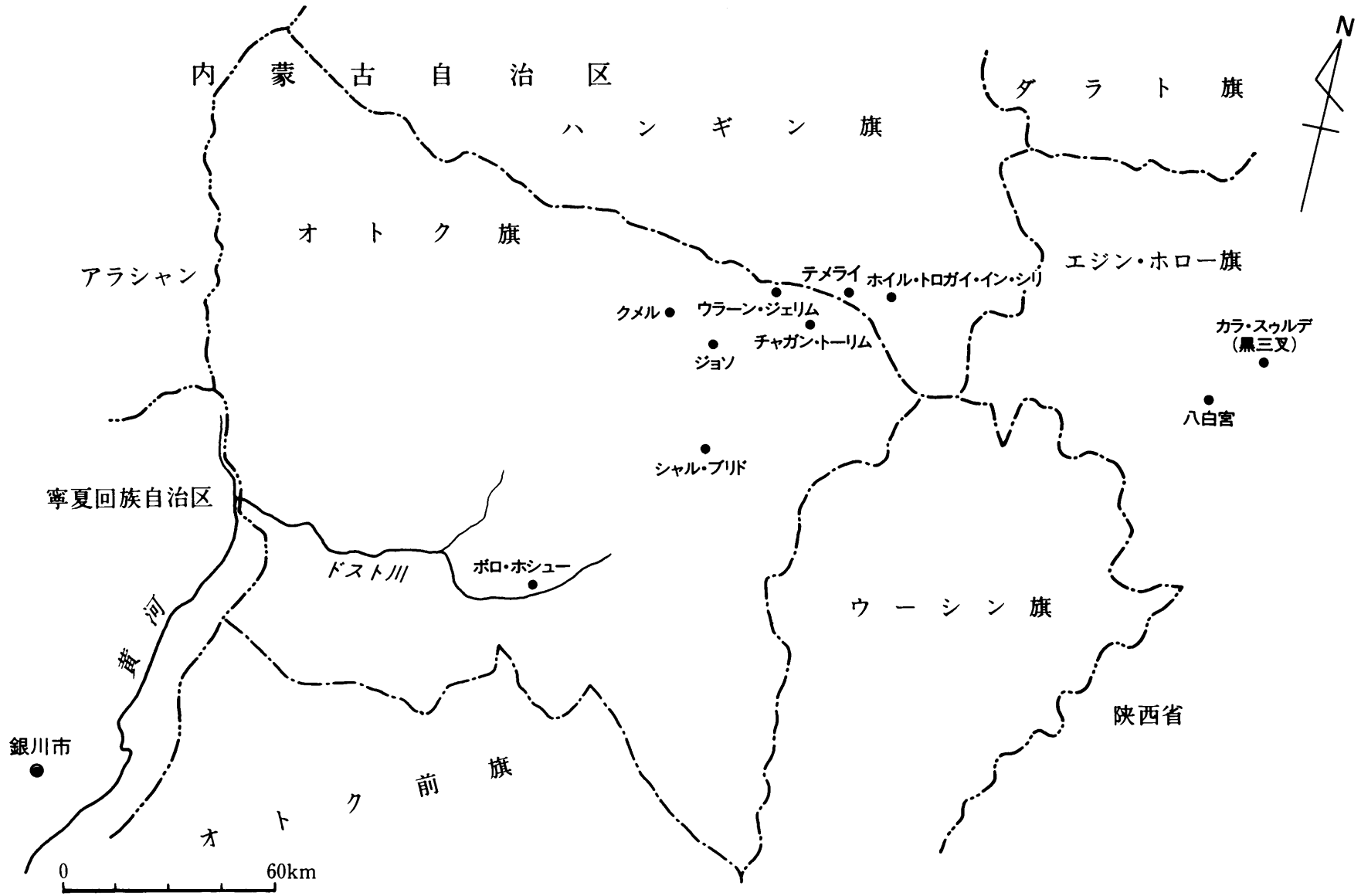
キーワード：末子，トロイ・エジン，ガリル祭，祖先祭祀，オルドス・モンゴル

multi-layered structure of the ancestor worship ritual of the Ordus Mongols will be examined. The Toloï Ejen ritual and *yaryl-un tayily-a* are both political rituals to demonstrate the superiority of the prestigious Borjigin family from which Cinggis Qaan was descended.

|                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 はじめに                   | 4 トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連           |
| 2 歴史文書にみるトロイ・エジンの祭祀状況    | 4.1 オトク・ユルルールチ職とダルハン・カーの役割   |
| 2.1 文書                   | 4.1.1 オトク・ユルルールチ職の伝承         |
| 2.2 文書にみる祭祀と職掌           | 4.1.2 最後のダルハン・カー：バダマ         |
| 3 ダルハトたちが伝えるトロイ・エジン祭祀の実状 | 4.1.3 文書のなかのダルハン・カー          |
| 3.1 ダルハトたちとトロイ・エジン祭殿の移動  | 4.2 ガリル祭                     |
| 3.2 トロイ・エジンの祭殿の形と御神体類    | 4.2.1 ガリル祭の火                 |
| 3.3 火打ち鎌：拝火祭からの視点        | 4.2.2 「堅いもの」：ガリル祭の供物         |
| 3.3.1 末子と火               | 4.2.3 祈禱用ヒツジの役割              |
| 3.3.2 拝火祭                | 4.2.4 末子の高貴さと反日常による「あの世」への接近 |
| 3.4 ヤムの権利を持つトロイ・エジンのダルハト | 4.2.5 「あの世」に住む諸祖先            |
| 3.5 トロイ・エジンの祭祀           | 4.3 未完の文書にみる埋葬儀礼の要素          |
| 3.5.1 祭祀の期日と名称           | 5 おわりに                       |
| 3.5.2 「天のことば」に集約される秘密性   | 5.1 末子トロイ・エジン祭祀と八白宮との関連      |
| 3.5.3 巡回                 | 5.2 祖先祭祀の重層的構造               |
|                          | 5.2.1 ガタギン一族の祖先祭祀            |
|                          | 5.2.2 祖先祭祀の供物                |
|                          | 5.2.3 ハーン一族の祖先祭祀の主宰者         |

## 1 はじめに

チンギス・ハーンの末子トロイ・エジン (Toloï Ejen) の祭殿 (*čayan ordu* 白宮) は、1956年までオルドス地域のオトク旗にあった。これは、郡王旗 (現在のエジン・ホロー旗) にあるチンギス・ハーンの祭殿 (八白宮) からは遠く離れている (地図参照)。トロイ・エジン祭殿の祭祀のうち、チンギス・ハーン一族の諸祖先を祭るガリル祭 (*yaryl-un tayily-a*) は、毎年陰暦3月20日に八白宮でおこなわれる。ガリル祭の主宰者は、末子トロイ・エジンの祭祀に従事する祭祀者のダルハト (*darqad*) であ



地図 トロイ・エジン祭祀に関する諸地域

った。末子トロイ・エジンみずからが一族の祖先を祭るという、モンゴルの末子相続制にもとづく祭祀活動を、末子トロイ・エジンの祭祀者たちが代行してきたのである。

トロイ・エジン祭祀とガリル祭については、サインジャラガルとシャラルダイがその著書『黄金オールドの祭祀』のなかで、簡潔な記述を提示している [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 132–140, 389–395]。著者は実地調査で得た情報に依拠しており、資料価値がきわめて高い。

トロイ・エジンの祭祀のはじまりについて明確に記した歴史資料はみつかっていない。祭祀者ダルハトたちは、元朝のフビライ・ハーンの時代に起源を持つと主張している。清朝時代と中華民国時代のトロイ・エジンの祭祀に関する資料は『成吉思汗八白室』という文書集に少量ながら収録されている。

本論文では、第一に、文書集『成吉思汗八白室』に収録されているトロイ・エジン関連の歴史資料を提示し、分析を通して、歴史上のトロイ・エジン祭祀の再構築を試みる。第二に、私自身が祭祀者ダルハトから入手した情報を中心に、サインジャラガルとシャラルダイの報告を参照しながら、かつてのトロイ・エジン祭祀の実態を復元する。第三に、トロイ・エジン祭祀とチンギス・ハーンの八白宮との関連に焦点をあてて歴史的考察をおこなう。一連の考察を経て最後に、モンゴルにおける祖先祭祀の重層的構造についての仮説を打ち立てたい。

まず、以下の論述に関する歴史的背景を述べておきたい。オールドス・モンゴルは、15世紀ころに形成されたモンゴルの6つの万戸集団のうち、右翼3万戸のひとつであった。右翼3万戸の指導者は、ジノンであった。ジノンは、副ハーンに相当し、大ハーンの意志にもとづいて、モンゴルの右翼3万戸を管轄する職務であった。ジノンは普通オールドス万戸に駐営し、オールドス万戸が主宰するチンギス・ハーンの八白宮祭祀を監督していた。オールドス・モンゴルは1635年に清朝の支配下に入った。1649年に盟・旗・ハラー・ソムという行政組織が導入された。その際、オールドスには6つの旗が設置された。それは、オールドス左翼前旗（ジュンガル旗）、オールドス左翼後旗（ダラト旗）、オールドス左翼中旗（郡王旗）、オールドス右翼前旗（ウーシン旗）、オールドス右翼中旗（オトク旗）とオールドス右翼後旗（ハンギン旗）の6つである。後に1731年にオールドス右翼前旗（ウーシン旗）から新たにオールドス右翼前末旗（ジャサク旗）が分離し、7つの旗となる。旗は、いずれもモンゴル固有の父系親族集団（oboy）<sup>1)</sup>を中

1) モンゴル社会において、父系親族集団を指すもっとも基本的なことばは、オボク（oboy）である。オボクは、祖先を共有する外婚集団である。オールドス・モンゴルのオボクについては、モスタールトの報告がある [MOSTAERT 1934: 21–54]。オールドス・モンゴルのオボクの

核に形成されたものである。そのため、オルドス・モンゴル人は、今日に至るまで各旗の名前を、その旗内の中心的な父系親族集団の名称で呼んできた。たとえば、左翼後旗をダラト旗、右翼前旗をウーシン旗と呼んできた。このような通称は、清朝時代の公式文書には登場しない [NARASUN 1989: 8-12]。

旗の最高責任者の公式名はジャサクで、これにはチンギス・ハーン一族の者が選ばれた。ジャサクには、清朝に対する功績の大小と忠誠度によって、親王、郡王、ペーラ、ベース、鎮国公、輔国公などの爵位が授けられた。民間では、旗の最高責任者をワン（王）、ノヤン、ワンイェ（王爺）、グシュー・エジン（旗の主君）、グシュー・ジャサク、などと呼んでいたが、本論文では、「旗王」と訳す。ジャサクの下には2人の協理（トサラクチ）という補佐役がおかれていた。ひとつの旗は、複数のハラーからなり、ハラーはさらにいくつものソムによって構成されていた。ハラーの長官はジャランで、ソムの長官はジャンギであった。

オルドス7旗は、ひとつの盟、イケ・ジョー（伊克昭）盟を形成していた。盟長はダーといい、各旗の「旗王」が順に担当した。清朝時代から中華民国にかけて、盟長ダーはチンギス・ハーン祭祀のジノン兼任していた。

## 2 歴史文書にみるトロイ・エジンの祭祀状況

『成吉思汗八白室』という七輯からなる文書集は、ナラソン（Narasun）とエルデムト（Erdemtü）が編集し、1985年から1987年にかけてオルドスの伊克昭盟檔案館から、ガリ版印刷で出版されたものである。収録された文書の時代は乾隆年間（1736-1795）から中華民国時代に至る。その対象はチンギス・ハーンの祭殿（八白宮）をはじめ、軍神カラ・スゥルデ（黒三叉）、それに1950年代までオルドス各地に存在したさまざまな祭殿に及ぶ。文書集には、祭祀者ダルハトたちからジノンや旗王に提出した祭祀の経過と結果に関する報告書、ジノンや旗王からダルハトに出した令状、祭祀者ダルハトの名簿、祭祀器具の詳細なリスト、祭祀において唱えられる各種祭詞など豊富な内容が収録されている。そのなかに、直接トロイ・エジン祭祀をあつかった文書は10篇あり、本論文ではそのうちの9篇について分析を試みる。ただし、この文書集は、伊克昭盟檔案館所蔵のオリジナル古文書を編集者が書き写したもので、その過程でどのような変容が生じたかについては、オリジナルをみていない私には判断

↘ 名称は、13世紀の『モンゴル秘史』に登場するオボク集団の名称や部族集団の名称と一致するものが多い。

のしようがない。オリジナルの現状翻訳は、原意をたもつため、基本的に逐語訳とした。訳文の句読点も訳者がつけたもので、必ずしもモンゴル文とは一致しない。

( ) は訳者が補った内容である。本来モンゴル文テキストにあった句読点は、その点の数に応じて・および：と表記した。また、[ ] 内の数字は文書の行数を示すものである。

## 2.1 文書

### 文書 1

*Čayanbatur-i Vačirbatu-yin oron-du dolon ežen-ü dörben čay-un tayily-a-yi erkilegülkü-ber bolba (1898)*

[1] *tayiji Čayanbatur tušiyaqu-yin učir. man-u yažar-ača dolon ežengegegen-ü jil büri-yin dörben čay* [2] *-un tayily-a bar kürjü mörgüdeg tayiji Vačirbatu jalyamji-yin čilöge yuyaysan-i yosuyar bolyaju egün-ü* [3] *oron-du čimadur bičig tušiyaba küliyemegče kinan üjeju ningdar qaday küliyen abju Toloj ežen-ü* [4] *dörben čay-un yeke tayily-a dur dutal ügei kürjü tayily-a takily-a-yin yosulal-i sayiqan güičedgen* [5] *mörgüju yabuytun osoldabasu ülü bolumui egün-ü tula tušiyaba:*

[6] *badarayultu törü-yin qorin dörbedüger on qabur-un terigün sar-a-yin qorin naiman-a.*

### 訳：

チャガンバートルをしてオチルバトの代わりにドロソ・エジンの四季の祭祀活動を担当させることにした件：

[1] タイジ・チャガンバートルに言い渡すこと。わが所（すなわちオトク旗）からドロソ・エジン・ゲゲン<sup>2)</sup>の毎年の四季 [2] の祭祀活動に行って参拝していたタイジ・オチルバト継承人が休みを乞うたことを許可し、その [3] 代わりに貴方に令状を渡す。受け取り次第、検討のうえ儀礼用の絹布を受け、トロイ・エジンの [4] 四季の盛大な祭祀活動に欠かさずに参加し、諸種の祭祀活動の儀礼を立派におこない、 [5] 参拝を遂げるよう。欠席など絶対あってはならない。このために言い渡す。

[6] 光緒24年（1898）春の最初の月の28日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1986b: 212]。

**分析** この文書は、トロイ・エジンの祭祀活動におけるジャラガムジ (*jalyamji*) と称する役の交代を告げるものである。ジャラガムジとは、「継承人、後継者」の意

2) ゲゲンとはモンゴル語で「明るい」、「輝かしい」との意味である。また、チベット仏教の高僧、活仏をもゲゲンと呼ぶ。

味である。清朝時代、ジャラガムジは旗王の長男、すなわち旗王の政治権力を継承し、王位につく予定の者を指す。祭祀活動におけるジャラガムジは必ずしも旗王の長男に限らないが、チンギス・ハーンの直系子孫すなわちボルジギン一族の出身でなければならない。いわば、ボルジギン一族を代表する身分で祭祀に立ち会うのである。この文書から、前任のジャラガムジが「休みを乞うた」場合、後任を任命する制度があったことは分かるが、その任期などは不明である。なお、旗の正式の文書でもトロイ・エジンを「ドロソ・エジン」（7つの主君）とも呼んでいたことが分かる。「7つの主君」という表現については、3.1と3.2で詳述する。

## 文書 2

*Toloi ejen-ü gegegen čomčoy-i šinedgen tungyaqu učir-a (1906)*

[1] *tayiji meyiren dayaçing Tümenülji ner-tür tušiyaqu-yin učir edüge Toloi ejen-ü öljiitü čingsang* [2] *irügelci Čoyijinjab nard-un medegülkü totor-a ene jil boyda Toloi ejen gegegen-ü čomčog-i šinedgen tungyaqu egeljiy-e* [3] *tokiyaysan tula ejegür-ün jirüm-iyer šine tungyaysan čomčoy-un qalqasu büged sang-un ger-ün modu qayaly-a* [4] *qačibci jüil-i iregülkü ulay-a qayiralaqu ajiyamu kemen medegülügsen enü. qayučin jirüm-tür neyilečigsen tulada egündür* [5] *tan-u beyes-i tomilaju bičig tušiyaba küliyen abumayča ede irügelci ner ene jüil-ün čomčoy-un* [6] *qalqasu sang-un ger-ün modu jüil-i jasažayan beledgejü jabdaysan ger-tür nutuy açi-yin totor-a* [7] *ača jokis-i üjejü açily-a unuy-a tusalan ögjü keregsegülüged jörčibesü ülü bolumui egün-ü tula* [8] *tušiyaba:*

[9] *badarayultu törü-yin yučin qoyaduyar on jun-u šegül sar-a-yin šin-e-yin doložan-a.*

### 訳：

トロイ・エジンの輝かしい祭殿を新装し、清める件：

[1] タイジでメーリン職でもあるダーチャン・トメンウルジらに言い渡すこと。この度トロイ・エジンのウルジイト・チンサン（丞相）[2]・ユルールチ職であるチョイジンジャブラが報告したなか、「今年はボクド<sup>3)</sup>・トロイ・エジンの祭殿を新装し、清める順番（にあたる年）」[3]になったため、古来からのしきたりに従い、新しくする祭殿のハーラガスおよび倉庫の木製の扉[4]（や）窓枠などを運ぶ役畜の手配を賜るよう」と書いてある。これは確かに古来のしきたりと一致しているため、この（件の担当）には[5]貴方を任命する令状を渡す。受け取り次第、ユルールチ職らがこの種の祭殿の[6]ハーラガスや倉庫に使う木材類を頼んでいる所に、近隣のなか[7]から適当な者を見つけて、運搬用の役畜

3) ボクドとは聖人の意味である。

を援助すべし。怠慢のないよう、このために [8] 言い渡す。

[9] 光緒32年 (1906) 夏の最後の月の7日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987a: 40-41]。

分析 光緒32年は丙午年で、トロイ・エジンの祭殿を数年に一度の割合で新装し、清める年にあたる。新装する際、祭殿のハーラガス、祭祀器具等を納める倉庫 (*sang-un ger*) も造り直し、もしくは一部を取り替えることになっていた。ハーラガス (*qalqasu* あるいは *qalqayasu*) とは、祭殿の天井を構成する木材 (*uni*) の先端を固定させる、篋 (*aruy*) の形をした装置である。普通のテントの装置を指す名称ではなく、とくに八白宮など祭殿類の装置を指すのに用いる用語である [SAYINJIRJAL & ŠARALDAI 1983: 11]。造った器具を運ぶ役畜は、旗政府が手配していたことが読みとれる。トロイ・エジンの祭祀者で、ダルハトのバダマ (Badma 1996年現在71才 写真1) が私に語ったところによれば、彼が子供のころ、オトク・ユルールチ (*otoy irügelci*) 職をつとめていたダルハトのチンバト (Čingbatu) という人物が、たくさんの祭祀器具を造っていたのを目撃したことがあるという。また、ハンギン旗内に住む有名な職人に依頼することもあったという。

### 文書 3

*Toloi ejen-ü tayily-a-yi erkilejü bayiysan Seröbdöntüb čilöge yuyuyusan uçir (1907)*

[1] *öljeitü čingsang irügelci Čoyiĵinĵab-tur tušiyaqu-yin uçir edüge čing kečiyeltü qongĵin Seröndöntüb* [2] *-ün ergün medegülügsen-ü totor-a šidar sayid da ĵasay beyise ĵinong noyan gegen tan* [3] *boyda Toloi ejen gegegen-ü ĵil büri-yin dörben čay-un bayar-un tayily-a dur ergükü ödge-yin qoni dörbe* [4]. *serĵim-ün čai dörbe. sarqud-un ariki naiman ĵing. soy-un yulir arban ĵing. ĵula-u* [5] *sar-a toso tabun ĵing bolqui-yi dooratu minu bey-e tögügerün beldeĵü tasural ügei ergügseger* [6] *iregsen bile. odo yaččakü öčöken-ü ger maši yadayuraysan-u deger-e tayily-a takily-a-yin alban-u* [7] *yabudal olan dabaqur boloyad eyin-kü tayily-a-yin ĵüil-i beledgen yaryaju čidaši ügei boluyad* [8] *boluyusan ünen uçir-i yaryaju medegülbe. oldabasu öröšiyejü minu nigen töröl-ün öljeitü čingsang* [9] *irügelci Čoyiĵinĵab-tur ĵakiy-a kürteĵülĵü beledgen iregüĵü yabuyulqu aĵiyamui kemen medegülĵügüi* [10] *eyimü-yin tula egün-i bičig tušiyaba. küliyen abumayča tušiyaysan-i dayaju eyin-kü* [11] *ejen gegegen-ü dörben čay-un yeke tayily-a dur keregesbesü ĵokiqu ĵüil-i činu bey-e tutayu tolim ügei* [12] *ariyun čeber ali sayin-iyar beledgeĵü čay čay-tu osoltayulul ügei ergüĵü yabusuyai. keregsel-ün* [13] *ün-e-dür ĵil büri-yin nigen mori ba esebesü morin-u ün-e olyuĵu yabuyulqu-yi qamtu-bar* [14] *yaryan. egün-ü tula tušiyaba.*



[15] *badarayultu törü-yin yücin yurbaduyar on ebül-ün dumda sar-a-yin arban-a.*

訳：

トロイ・エジンの祭祀を司っていたセルドントプが休みを乞うた件：

[1] ウルジイト・チンサン（丞相）・ユルールチ職であるチョイジンジャブに言い渡す件。この度チン・ケチエルト・ホンジン職であるセルドントプ [2] の提出した（文の）なかに、「御前大臣ダー・ジャサクでペース爵の、ジノン・ノヤンであられる貴殿は、[3] ボクト・トロイ・エジンの毎年の四季の祭祀、宴に捧げる丸煮用のヒツジ4頭、[4] 儀礼用の茶4、乳酒8斤、（儀礼用の）パンに使う小麦粉10斤、灯明の [5] バター5斤なるものを、臣が謹んで用意して中断することなく実施して [6] きたものである。ただ、今や哀れな小臣の家庭が甚だ貧乏になったため、祭祀活動の公務の [7] 件が複雑であることから、祭祀活動の諸々のことをやり遂げることはもはやできなくなって [8] きているのが事実であることを申しあげる。臣の勝手な申し入れを許し、私の親族の一人であるウルジイト・チンサン（丞相）[9] ・ユルールチ職のチョイジンジャブにその旨を伝えていただき、準備のうえ（臣のポストに）つけるよう、申しあげる」と報告してきた。[10] そのため、これを令状にて言い渡す。受け取り次第、言い渡された件を遵守し、この [11] エジン・ゲゲンの四季の大祭に関わる諸件を貴方が欠かさずに [12] 明らかに、最大の（誠意を持って）準備し、四季折々の（祭祀を）過失なく実施するよう。（今後）使用品の [13] 費用として毎年ウマ1頭若しくはそれに相当する金を支払う。このことも含め共に [14] 告げる。このために言い渡す。

[15] 光緒33年（1907）冬の仲月の10日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987a: 58-59]。

分析 1907年のオルドスのジノンは、ウーシン旗の旗王チャクドラセレン（Čaydürsereng）であった [BOU ŠAN 1991: 13; ODUNČEČEG 1987: 193; 中国人民政治協商会議杭錦旗委員会文史資料研究委員 1990: 27-31; VAN HECKEN 1972: 147]。この文書は、トロイ・エジンのダルハトで、ホンジン職のセルドントプからジノンに提出した文を受けて、ジノンからチンサン・ユルールチ職のチョイジンジャブに出された令状である。これは、トロイ・エジンのダルハトたちの任命、交代など人事権はジノンの手中にあったことを物語っている。ジノンは、チンギス・ハーンの八白宮の祭祀活動を統轄するだけでなく、トロイ・エジンの祭殿のように、八白宮以外の祭殿もジノンの管轄下にあったことが分かる。ジノンは、みずからもトロイ・エジンの祭殿にヒツジの丸煮、茶、乳酒、小麦粉、バター等の供物を捧げていた。ジノンの供物をダルハトが責任をもって献上していた。

このダルハトは、家庭が貧乏になり、祭祀に専念できなくなったため、親族の者を

その代わりに任命するよう申請している。これをみる限り、ダルハトが引退するにあたって、後任に親族を推薦していたと察することができる。ただし、この親族とは、血縁的にどのような関係にあるかは不明である。さらに、この時点で、ダルハトたちの一部が貧困に陥っていたことが浮き彫りになっている。おそらく貧困化は、清朝末期から始まった漢族農民のオルドスへの入植と草原開墾 [楊 1996: 671-672] に起因するものであろう。現在トロイ・エジンのダルハトたちは、トロイ・エジンの祭殿が度々駐営地を変えたのも、土地開墾と漢族の入植によると証言している。ダルハトの貧困化で祭祀活動にも影響が出る恐れがでてきたため、政府ジノンの方からウマ1頭あるいはそれに相当する金を援助することになったのであろう。

#### 文書 4

*Toloi ejen-ü dörben çay-un tayily-a (1918)*

[1] *Vangjalnorbu Suvadi nar-tur tušiyaqu-yin uçir bayičayabasu* [2] *šidar-tur yabuqu törü-yin beyile minu bey-e boyda Toloi ejen-ü jil büri-yin dörben çay-un bayar* [3] *yeke tayily-a-dur qayučin jirüm-ün yosuyar ödge sarqud yosuçilan güiçed ergün jalbiraysayar irejüküi* [4] *eyin-kü tayily-a-yin yabudal-i urid qongjin Seröbdöntüb-in bey-e tomilan güiçedegseger iregsen* [5] *bolbaçu odo tegün-ü bey-e yadamay boluysan deger-e ebedčin keniy-e tei boluysan uçir-iyar* [6] *čilöge yuyaysan-i yosuyar bolyayad egün-ü orondu tan-u beyes-iyer enekü tayily-a -yi tomilan yabuyulur-a* [7] *egün-i biçig tušiyaba. küliyemegče tayily-a-yin kereg-i erkimlen kečiyejü jil büri-yin jun-u segül sar-a* [8] *-yin šin-e dür qariyatı sang-un yañar-a kürün irejü nigen jil-ün dörben tayily-a-yin ödge-yin* [9] *qoni dörbe. nigen tayily-a-dur dayaldun keregsekü serjim sarqud soy-un yulir julan-u toso jüil* [10] *-ün ün-e-dü çai dörbe-yi tušiyar küliyen abaçiju* [11] *çay çay-un tayily-a takily-a-yi ali sayidur güiçedgen yabuyulsuyai yaru qayışikereg tür büü kürügülsügei* [12] *egün tula tušiyaba:*

[13] *dumdadu ulus-un doloduyar on šira morin jil-ün jun-u segül sar-a-yin arban nigen-e.*

#### 訳：

トロイ・エジンの四季祭祀：

[1] ワンジャルノルブ、ソワディらに言い渡す件。調べた所 [2] 御前大臣、国のペーラである臣は、ボクド・トロイ・エジンの毎年四季の盛大な [3] 祭祀に、古来からのしきりに従い、丸煮と乳酒を謹んで調達して献上してきた。[4] そこで、祭祀の詳細を以前はホンジン爵のセルブドントブを任命して担当させてきた [5] が、今や彼は身体が疲労してきたうえ、持病を持っていることから、[6] 休みを乞うてきたので、それを許可する。

その代わりに貴方を祭祀の担当に任命する。[7] これを令状にて言い渡す。受け取り次第、祭祀のことを注意深く管理するように。毎年の夏の最後の月 [8] の初日に、当旗の倉庫に来るように。(その際) 一年間の4つの祭祀に使用する丸煮の [9] ヒツジ4頭、各祭祀にも使用する儀礼用の乳酒、小麦粉、灯明用のバターなど [10] の購入費として茶4個を渡す。引き受けた後は [11] 四季折々の祭祀活動を最大の(誠意を以て)実施するように。勝手な行動をしてはならない。[12] このために言い渡す。

[13] 中華民国7年(1918)・戊午年夏の最後の月の11日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 24-25]。

分析 この文書は、ベーラ爵の旗王からダルハトに出されたものである。当時のオトク旗旗王ガルザンルルマワンジャルジャムソは郡王爵で、一方、ジノンをつとめていたダラト旗旗王のソンベルバト (Sömbürbatu) はベーラ爵であった [ODUNČEČEG 1987: 189-213; VAN HECKEN 1972: 141, 153]。文書3と同じくダルハトの人事に関する内容である以上、ジノンのソンベルバトから出されたものと考えられる。文中のセルブドントプと文書3のセルドントプは同一人物であろう。先般1907年に任命したセルドントプが11年後に疲労と持病を理由に休みを乞うていることを受けて、新たにワンジャルノルブとソワディを任命している。ただし、この2人の職掌は不明である。

## 文書 5

*Toloi ejen gegen-ü tuqai (1918)*

[1] *šidgegči daruy-a kemegdekü giyön vang öcöken degüü Galzangrulmavangjaljamsu kečiyen.* [2] *šidar sayid beyile noyan aq-a-yin gegen-e amoyulang-i ayiladqan qaday bariba. taširam-dur* [3] *ayiladqaqu anu mönüken* [4] *Toloi ejen qoroyan-u darqan čingsang irügelči Čoyiji. tayiši Töbšinjiryal. tayibu Serengdöngrüb. mangnai Malhažab.* [5] *qonjin Öyünbelig. tuul Jiryal yalči Arbinsang. altan šerbi Odqan nar-un yuyun medegülkü totor-a ača* [6] *Toloi ejen gegen-ü jigelen sayadayulju büküi orčin toyorin qoyar qošiyyu ača qoriyyul yažar jiyaju jakiy-a bičig* [7] *olyusuyai oldabasu erten-ü qayučin jirüm-iyer orčin toyorin qoriyyul-un yažar qayiralaqu ačiyamu kemen* [8] *medegülün egüntür bayičayabasu erte ižayur-i erkišigülün takiysayar iregsen erkim čiqula šitügen mön-e* [9] *tulada. qayučin yosuyar qariyyatu qošiyyu-u yažar ača qorin tabun-u yažar-un jigi-yin qoriyyul yaryaju* [10] *ögeü-ber boluysan-i yaryan ayiladqay-a. oldaqul-a* [11] *šidar sayid beyile noyan aq-a-yin gegen tolitan öröšiyejü öcöken darqad-tur nigen adali öröšiyel kürtegejü* [12] *jigi-yin qoriyyul-un yažar jiyān qayiralaqu*

*bolbau qoyişi qariyu iregülkü ajiyamu egün-ü tula amoyulang-i [13] ayiladqan bariba:*

*[14] dumdadu ulus-un šira morin jil-ün ebül-ün dumdadu sar-a-yin sayin edür-e.*

訳：

トロイ・エジン・ゲゲンについて：

[1] (旗政を) 管理する責任者と称する所の郡王, 卑小なるガルザンルルマワンジャルジャムソが謹んで [2] 御前大臣, ベーラ爵であられるノヤン, 貴兄の安康をお祈りして儀礼用の絹を献上すると共に [3] 申しあげること, この前 [4] トロイ・エジン・ホローのダルハンでチンサン (丞相) ・ユルルチ職のチョイジ, タイシ (太師) 職のトブシンジャラガル, タイポ (太傅) 職のセルンドルブ, マンナイ職のマルハジャブ, [5] ホンジン職のオユンビリク, トゥール職のジャラガル, ガルチ職のアルビンサン, アルタン・シュルビ職のオトゴンらの (出した) 要請書のなかから, [6] 「トロイ・エジン・ゲゲンが御駐営になる地として, その近くの両旗から「禁地」(の範囲) を画定し, 通達文 [7] を賜るよう。古来からのしきたり通りに (祭殿) 周辺の「禁地」を賜るように願う」と [8] 報告してきた。そのため, 調べた所, (トロイ・エジンは) 古き伝統を貴び, 祭ってきた極めて大事な守護神である [9] ことから, 古来からのしきたりに従い, 我が旗の領地から (広さ) 25里の一带を駐営地の「禁地」として画定して [10] 献上することになった件を申しあげる。申し入れが届き次第 [11] 御前大臣, ベーラ爵であられるノヤン, 貴兄が鑑みて, 卑小なダルハトたちに同じような恩賜を与えて, [12] 駐営地の「禁地」を画定して献上するよう, 御返答を下さるよう。このために安康を [13] お祈りする次第である。

[14] 中華民国戊午年 (1918) 冬の仲月の吉日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 10-12]。

分析 これはオトク旗旗王ガルザンルルマワンジャルジャムソから隣接するハンギン旗の旗王アルタンオチル (Altanvačir)<sup>4)</sup> に出した文書である。この文書のなかで, ガルザンルルマワンジャルジャムソ王は, トロイ・エジンの祭殿は古い伝統を有する, 極めて大事な守護神であると位置づけている。私がトロイ・エジンのダルハトから聞きとった情報では, トロイ・エジンの祭殿は長いあいだオトク旗とハンギン旗の旗境地帯に駐営していたという。そして両旗からそれぞれ「駐営の禁地<sup>5)</sup>」(jigi-yin qoriyul) として一定の範囲が与えられていた。この文書はまさに「駐営の禁地」に

4) Van Hecken は, ハンギン旗の旗王アルビンバヤルの死去した年を1917年としているのに対し、『杭錦文史』では1913年6月20日としている。いずれにしても, 1918年の時点ではすでに, アルビンバヤルの息子, アルタンオチルの治世に入っていた [ODUNČEČEG 1987: 189-213; VAN HECKEN 1972: 147; 中国人民政治協商会議杭錦旗委員会文史資料研究委員 1990: 34]。

5) ジヒあるいはジギ (jigi) とは, 大ハーンやジノンが, 宮帳オールドを設置する場所のことである。八白宮の駐営地もジヒという [MOSTAERT 1941: 194, 1956: 19-21; 楊 1995: 44-45]。

関するものであるが、内容からみれば、トロイ・エジンのダルハトたちはまず、オトク旗の旗王に「駐営の禁地」を申請し、それを受けてオトク旗旗王の方からハンギン旗にも同様な措置を取るよう交渉していることが分かる。トロイ・エジンの祭殿は、どちらかといえば、オトク旗と関係が深かったようである。「駐営の禁地」は昔から与えられていたと考えられるが、新たに申請しているのは、やはり漢族の入植と草原開墾により、祭殿が移転を繰り返したためであろう。

この文書はトロイ・エジンの祭殿を維持していたダルハトたちの職掌についても詳しい情報を提供している。文書からトロイ・エジンのダルハトたちの職掌は主としてチンサン・ユルールチ、タイシ、タイポ、マンナイ、ホンジン、トゥール、ガルチ、アルタン・シェルビの8つであったことが分かる。これは、トロイ・エジンのダルハトであるバダマの記憶している8つの職掌とは必ずしも一致しない。バダマはみずからがつとめていたダルハン・カー (*darqan kiya*) をあげている (3.4参照)。

## 文書 6

*boyda Toloï ejen-ü čomčoy-i šinedgekü tuqai* (1919年?)

[1] *meyiren dayačing Sayin šiduryu Möngkebatu nar-tur tušiyaqu-yin učir edüge* [2] *Toloï ejen-ü jayisang Šanjimidub nar-un medegülkü dotor-a ene jil boydaToloï ejen gegen-ü čomčoy-i šinedgekü* [3] *tungyaqu egeljij-e quluyan-a qonin jil tokiyaltuqu ača ene jil qonin jil tokiyaysan ača* [4] *ižayur-un jirüm-iyer šin-e tungyaysan čomčoy qalqayasu büged sang-un ger-ün modu qayaly-a* [5] *qačabči jerge-yi iregülkü ulay-a qayiralaqu ajiyamu kemen medegülügsen anu qayučin jirüm-dür* [6] *neyilečigsen tulada egün-dür tan-u beyes-i tomilažu bičig tušiyaba küliyemegče tušiyaysan-i dayaju ede* [7] *jayisang nar ene jüil-ün čomčoy-un qalyasu sang-un ger-ün modu jüil-i jasažayan beldgeju* [8] *jabdaysan ger-tür nutuy ayči-yin dotorča jokis-i üjeju busu qošiyu-u ayil arad ača ačily-a-yin* [9] *unay-a tusalan ögju kereglegülüged jörčibesü ülü bolumui. egün-ü tula tušiyaba:*

[10] *širayčin qonin jil-ün namur-un terigün sar-a-yin šin-e-yin naiman-a.*

### 訳：

ボクド・トロイ・エジンの祭殿を新装する件：

[1] メーリン、ダーチャンであるサイン・シュドルグー<sup>6)</sup>、ムンケバトラに言い渡す件。この度 [2] トロイ・エジンのザイサン (職のダルハト) シャンジミドプらが報告してきたなかで、「トロイ・エジンの祭殿を新装し、[3] 清めるべき年は、子年若しくは未年である

6) サイン・シュドルグーのサインとは「良い」、シュドルグーは「正直」との意味である。

が、今年はそのうちの未年にあたる。そのため、[4] 古来からのしきたりに従い、新装し、清めるのに必要な、祭殿のハーラガスや倉庫に使用する木製の扉、[5] 窓枠等を運んでくるための役畜を賜るよう」とある。これは古いしきたりに [6] 一致しているため、これには貴方を任命し、令状を渡す。受け取り次第、命令を遵守し、彼ら [7] ザイサン（宰相）らが祭殿のハーラガス、倉庫の木材等を注文して [8] おいた（職人の）家に、近所周辺から適当なのを見つけ、他の旗（から移った）牧民家から運搬用の [9] 家畜を調達して使わせるように。怠慢な行為は一切してはならない。このために言い渡す。

[10] 己未年秋の最初の月の8日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 27]。

分析 文書の年代は己未年としている。近世において己未年としてまず考えられるのは1859年と1919年であるが、1928年に書かれた文書9にもザイサン職のシャンジミドブという人物名がみられることから、1919年に特定することができよう。

トロイ・エジンの祭殿を新装し、清める年として子年若しくは未年をあげているが、文書2では丙午年が新装する年にあたるとあり、両者は矛盾している。丙午年のつぎは丁未年で、文書6の記述が正しいという前提で考えれば、文書2でいう「今年」とは、恐らくそのつぎの丁未年を指しているのであろう。

新装にあたって、運搬用の役畜をほかの旗からオトク旗に移り住んだ牧民から徴収するようにと書いてある。これら他旗からの牧民のほとんどは、入植漢族による草原開墾で放牧地を失い、オトク旗へ避難してきた者である。清朝時代末から中華民国時代のはじめにかけて避難してきた者たちは、もとの旗と移り住んだ旗との両旗から徴税されることとなっていたのである。

## 文書 7

*Toloi ejen-ü dörben čay-un tayily-a (1922)*

[1] *tayiji Šajingerel-tür tušiyaqu-yin učir bayičayabasu qariyatu qošiyu ača nigen tayiji-yi yaryaju* [2] *Toloi ejen gegen-ü dörben čay-un yeke tayily-a dur jalyamji bar mörgügülügseger iregsen jürüm bui-yin tulada egün-dür* [3] *činu bey-e-yi jalyamjilan mörgügülkü ber toytaju bičig tušiyaba. küliyemegce tušiyaysan-i* [4] *kečiyenggüilen dayaju jil büri-yin qabur-un segül sar-a-yin qorin nigen-ü čayan sürüg-ün tayily-a* [5] *jun-u dumdadu sar-a-yin arban tabun-u nayur-un tayily-a. namur-un segül sar-a-yin arban qoyar* [6] *-un sörge-yin tayily-a ebül-ün terigün sar-a-yin šin-e-yin yurban-u tasman-u tayily-a-yin urid inegši* [7] *kürün irejü ningdar salta-yi küliyen abuyad tende kürjü takily-a-yi ali ariyun čeber-iyer güičedged* [8] *učir-i medegülün adis jüil-i kürgey-e irejü yabuytan qayışikereg-tür kürgegüljü uytu ülü bolumui* [9]

*egün-ü tula tušiyaba:*

[10] *dumdadu ulus-un arban nigedüger on qar-a noqai jil-ün qabur-un segül sar-a-yin qorin tabun-a.*

訳：

トロイ・エジンの四季祭祀：

[1] タイジ・シャジンゲレルに言い渡す件。調べた所では、当旗から1人のタイジを任命して [2] トロイ・エジン・ゲゲンの四季の大祭祀において、継承人として参列させてきたしきりがあるため、これには [3] 貴方を継承人として参列させることにしたので、令状を渡す。受け取り次第、命令を [4] 厳重に守り、毎年春の最後の月の21日の「白い群れ祭」、[5] 夏の仲月の15日の「湖の祭」、秋の最後の月の12日 [6] の「口枷の祭」、冬の最初の月の3日の「ダスマ祭」、(などの祭祀がおこなわれる際、いずれも) 事前にこちらに [7] 来て、儀礼用の絹布を受け取ったうえ、祭殿の所に行き、祭祀をもっとも清らかに実施した後、[8] 結果を報告し、恩賜類を届けてくるように。勝手な行動は断じてしてはならない。[9] このために言い渡す。

[10] 中華民国11年(1922) 壬戌年春の最後の月の25日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 31-32]。

分析 文書1と同じく継承人の新たな任命に関する内容である。文書1では1898年に継承人の交替がおこなわれたが、文書7では1922年にシャジンゲレルが誰と交替したかは不明である。さらに、この文書はトロイ・エジンの四季折々の祭祀の名称を記録している点でも貴重である。ダルハトのパダマの語った祭祀の名称と若干違う点もみられる。文書に示されているトロイ・エジンの祭祀期日や名称とパダマの情報、それにチンギス・ハーンの八白宮の祭祀とを比較対照して、表1にまとめた。

## 文書 8

*Toloi ejen-ü čomčoy ordun yal-du šitabai kemegsen učir (1928)*

[1] *šidgedči daruy-a jasay giyön vang öcöken degü Galzangrulmavangjaljamsu kečiyen [2] öröšiyeltü qočinan (?) da sayid jasay giyön vang noyan aq-a-yin gegen-e buyantu tümen amoyulang-i [3] ayiladqan qaday bariqu-yin taširam-dur jöb jiyalhuri suryal-i kürtegekü-yi yuyun medegülkü anu mönöken [4] qariyatu qošiyu-u jегün eteged-tü orošiyulun tayiju бүкүи [5] Toloi ejen gegen-ü šitügen jun-u dumdadu sar-a-yin šin-e-yin yurban-u tayily-a-yin daray-a mön yurban-u söni [6] čomčoy ordun šitügen jüil yal-dur nisbei kemen medegülün iregsen*

表1 トロイ・エジンの祭祀と八白宮祭祀

|         | 期 日  | 祭祀名称                          |
|---------|--|-------------------------------|
| 文 書 記 録 | 春の最後の月（陰暦3月）の21日<br>夏の仲月（陰暦5月）の15日<br>秋の最後の月（陰暦9月）の12日<br>冬の最初の月（10月）の3日 | 白い群れ祭<br>湖の祭<br>口枷の祭<br>ダスマ祭  |
| バダマの情報  | 正月1日<br>陰暦3月21日<br>陰暦5月15日<br>陰暦10月12日                                   | ?<br>口枷の参拜日<br>仔ウマの祭<br>湖の参拜日 |
| 八白宮の祭祀  | 陰暦3月21日<br>陰暦5月15日<br>陰暦8月12日<br>陰暦10月3日                                 | 白い群れ祭<br>湖の祭<br>口枷の祭<br>ダスマ祭  |

資料出典：1)『成吉思汗八白室』第六輯 2)『黄金オールドの祭祀』3) ダルハン・カー・バダマの情報

*egün-e-i tüşimel yaryaju [7] qariyatu darqad kümüs ner bayiçayabasu tayily-a takily-a aça genedde osoltayuluysan yabudal ügei [8] büged yal-dur nisügsen çomçoy totor-a qoyar altan tuuq-a oroşiju bayiysan-i edüge [9] şitügen bolyan tayiju büküi-yi yaryan medegüljü tus-qayilan meyiren jerge kiya Buyangeşig-i barayalayulun odtuyuluysan-i [10] ayiladqay-a olda-qul-a [11] öröşiyeltü qoçinan ded da sayid jasay giyön vang noyan aq-a-yin gegen toliçan öröşiyejü [12] da jinong-un yajar-a enekü yabudal-i medegülkü be ölükü kergibesü jokiqu-yin jöb jiyalta kürtegen qayiralaqu [13] -yi yuyun küsejü egün-ü tula buyantu tümen amoyulang-i ayiladqan qaday bariba:*

[14] *dumdadu ulus-un arban doloduyar on şir-a luu jil-un jun-u segül sar-a-yin şin-e-yin tabun sayin edür.*

訳：

トロイ・エジンの祭殿が火災に見舞われた件：

[1] (旗政を) 管理する責任者，ジャサク郡王，卑弟ガルザンルルマワンジャルジャムソが謹んで [2] 慈悲深いホチナン<sup>7)</sup>・ダー，大臣ジャサク，郡王ノヤンであられる貴兄の幸福と安康を [3] お祈りして儀礼用の絹布をさしあげると共に，正しい御指導と御教示を賜るようお願いし，報告する。この前 [4] 当旗の東部に駐営して祭っていた [5] トロイ・エジン・ゲゲンの守護神は，夏の仲月の3日の祭祀がおこなわれた後，3日の晩， [6] 祭

7) ホチナンの意味は不明である。



殿及び御神体類が火に見舞われた、と報告してきた。これを（受けて）部下を出して [7]（祭祀を）担当するダルハトの者らを調べた所、祭祀活動を軽率に誤ったことなどがなく、[8] 火に見舞われた祭殿のなかには金の帯飾りが2つ保存されてあって、これを [9] 御神体として祭っていたことを報告した。特にメイリン職の従者ブヤングシクを参勤に赴かせる旨を [10] 申しあげる。届いたら、[11] 慈悲深いホチナン・副ダー、大臣ジャサク、郡王ノヤン、貴兄の鑑みでお許しいただき、[12] ダー・ジノンの所にこの件を報告し、今後いかが致せば正しいかを御指導下さるよう [13] お願い申しあげる。このために（貴兄の）御多福と安康をお祈りして儀礼用の絹布をさしあげる次第である。

[14] 中華民国17年（1928）戊辰夏の最後の月の5日吉日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 44-45]。

分析 これはオトク旗旗王ガルザンルルマワンジャルジャムソからジノンに提出した、トロイ・エジンの祭殿に火が発生したことに関する報告で、極めて丁寧な口調で書かれている。当時のジノンはジャサク旗の旗王シャクドラジャブ (Šaydurjab) であった [ODUNČEČEG 1987: 189-213; VAN HECKEN 1972: 149]。

報告によると、トロイ・エジンの祭殿に火が発生したのは1928年陰暦の5月3日の夜で、報告の日付は陰暦の6月5日となっており、火が発生してすでに一ヶ月経過している。旗王は火が発生したとき、役人を派遣して調査させたことなど比較的详细な情報をジノンに報告しており、トロイ・エジンの祭殿がジノンの管轄下にあったことをあらためて証明している。御神体 (šitügen) として祭っていた金の帯飾りも火事に巻きこまれたことをほのめかしている。ダルハトのパダマとウルグン・ダライ (Örgön Dalai 1996年現在63才 写真2) らも祭殿内に御神体として男性用の帯飾りがあったと証言している。

## 文書 9

*Toloi ejen-ü čomčoy ordu yal-du abtaysan tuqai (1928)*

[1] šidgegči daruy-a otoy ača [2] čiyulyan-u kereg tusalan šidgegči daruy-a jasay törü-yin giyön vang Galzangrulumavangjaljamsu tusalayči [3] tayiji nar-un medegülün kürjü iregsen bičig-tür. medegülkü-yin učir mönöken qariyatu qošiyun-u jegün [4] eteged-tü orošiyulun tayiju büküi [5] Toloi ejen-ü darqad čing kečiyeltü qongjin Seröbdöntüb. jayisang Šanjimidub nar-un ergün medegülün iregsen ergülte [6] bičig tur erten-ü urid ača inereü Toloi ejen gegen-ü dörben čay-un tayily-a takily-a erkilün [7] takiysayar iregsen anu bui bila. ene jun-u dumda sar-a-yin šin-e-yin yurban-u tayily-a bar darqad bidanar [8] ali ariyun čeber-iyer ariyulan

*tayily-a takily-a ban ergüged orošiyuluysan-u daray-a mön šin-e-yin* [9] *yurban-u söni genedde yal-un ayul egüsüged čomčoy ordu erkeden. čirgi. altan bičig.* [10] *mangnuj olboy. Činggis ej-en-ü kürüg türi bolyan quduy edeger šitügen jüil nisügsen el-e učir* [11] *-iyan yaryan medegülye oldabasu degerece toličan öröšijejü qayiralaqu ajiyamu egün-ü tula ergün bariba.* [12] *kemen medegülün irejügüi. eyimü-yin tula man-u yažar ača meyiren jerge jalan janggi Čayadai-yi tusqayilan* [13] *yaryažu mayadlan bayičayalybasu. tegün-ü qoyiši medegülün iregsen anu. darqad-un medegülül tei* [14] *nigen adali medegülün iregsen eyin-kü učir-i yaryan medegülye. oldaqul-a šidar-tur yabuqu* [15] *iüi vei ši ded čiyulyan-u terigün jasay giyön vang noyan tan toličan tungyayažu qayiralaqu ajiyamu* [16] *egün-ü tula medegülün bariba.*

[17] *dumdadu ulus-un arban doloduyar on šir-a luu jil-un jun-u segül sar-a-yin šin-e-yin tabun-a.*

訳：

トロイ・エジンの祭殿が火事に遭った件：

[1] (旗政を) 管理する責任者オトクから, [2] 盟の諸事を担当する責任者, ジャサクで, 国の郡王ガルザンルルマワンジャルジャムソ, 協理 [3] タイジらの報告してきた書状では, 以下のことを報告している。この前当旗の東 [4] 部に駐営し祭っていた [5] トロイ・エジンのダルハトであるチン・ケチエルト・ホンジン職のセルブドントプ, ザイサン (宰相) 職のシャンジミドブラの報告してきた [6] 書状には「昔から今日までトロイ・エジン・ゲゲンの四季祭祀を引き受けて [7] 実施してきたものである。この夏の仲月の3日の祭祀に, ダルハトの我らは [8] もっとも明らかに祭祀をやり遂げた後, 同じく [9] 3日の晩に突然火の災厄が起こり, 祭殿をはじめ, チャルキ<sup>8)</sup>, 金書<sup>9)</sup>, [10] 蟒緞の座布団, チンギス・エジンの肖像画, ボルガン・ホトク<sup>10)</sup> などこれらの御神体類が火に見舞われたこと [11] を隠さずに報告する。届き次第, 鑑みのうえお許しいただくよう, このため

8) ダルハトたちの話では, チャルキとは, 龍頭の飾りを彫った紅檀の木板に「天のことば」を彫り, さらに彫り跡に金を注いでつくった特別な祭祀用楽器であるという。「天のことば」とは「満州語らしい文字」で書いてあったという。

9) オルドスにはかつてさまざまな「金書」(*altan bičig*) と称する祭祀文書があったようである [SAYINJIR/AL & ŠARALDAI 1983: 75]。オルドスには八白宮以外にも数多くの祭殿があり, 私は, おそらくひとつの祭殿に少なくとも一部の「金書」があったと想像する。

10) 「ホトク」とは, モンゴル語で福祿の意味で, ボルガ (*bulay-a*) とは貂である。サインジャラガルとシャラルダイによると, チンギス・ハーンとボルテ夫人の祭殿にも「ボルガン・ホトク」があったという。それは, 貂の皮と五色の絹布でつくった, ふさふさとしたもので, チンギス・ハーンの遺骨箱の両側に飾ってあった [SAYINJIR/AL & ŠARALDAI 1983: 58]。『アルタン・ハーン伝』にはモンゴルの6つの万戸集団が八白宮の前に集まって, 松の樹から掲げたブルガン・ホトクに叩頭し, ボディ・ハーンにハーンの称号を, メルゲン・カラにジノンの称号をそれぞれ授けたとある [珠栄嘎 1991: 207]。また, マンドハイ・ガトンの伝説では, マンドハイ・ガトンが八白宮を訪れ, 求子の祈願を託した行為を「ホトクを願う」(*qutuy yuyuqu*) と表現していることから, ボルガン・ホトクは豊饒信仰と関わる装置であろうと考えられる。

に申しあげる。」[12]と報告してきた。そのため、我々の所からメイリン爵のジャラン・ジャンギであるチャガダイを特に[13]派遣して調査させた所、彼の報告もまたダルハトの報告と[14]まったく一致していることを申しあげる。届き次第、御前大臣[15]イウィシ<sup>11)</sup>、副盟長で、ジャサク郡王、ノヤンであられる貴殿が鑑みのうえ、御恩を賜るよう。[16]このために報告した。

[17] 中華民國17年(1928)戊辰年夏の最後の月の5日 [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 63-65]。

**分析** これもオトク旗旗王からジノンへ提出された火事に関する報告で、文書8と同じ日付となっている。文書8では旗王が最初メイリン爵の従者を派遣していたが、文書9ではその後またメイリン爵のジャラン・ジャンギを派遣していたことが分かる。ジャラン・ジャンギは旗の役人である。同じ日に2通の報告が提出されていることは、事件の重大性を物語っている。文書9の方は文書8よりもさらに詳しく報告しているのが特徴的である。

焼失したものとして祭祀用楽器チャルキ、金書、蟒緞の座布団、チンギス・ハーンの肖像画、ボルガン・ホトクなどがあげられている。そのうちチンギス・ハーンの肖像画は御神体として祭られていた可能性が高い。チャルキと蟒緞の座布団は祭祀器具の類に入る。金書はいわば祭祀文書である。現在生存しているダルハトたちはこの1928年の火事を直接経験していないが、火事はトロイ・エジンの祭祀活動の運営に大きなダメージを与えたであろうと推測される<sup>12)</sup>。

## 2.2 文書にみる祭祀と職掌

以上9篇の文書に登場する祭祀者ダルハトとその職掌をまとめたのが表2である。これらの文書を総合的に分析すると、以下のことが明らかである。

第一、トロイ・エジンはまたドロソ・エジン(7つの主君)とも呼ばれ、古くから祭られてきた重要な守護神と位置づけられている。その御神体として金の帯飾り、チンギス・ハーンの肖像画などがあった。祭殿はオトク旗の東部、ハンギン旗との境界地帯にあり、両旗からそれぞれ一定範囲の「駐営の禁地」が与えられていた。

第二、トロイ・エジン祭殿はオトク旗と緊密な関わりがあった。オトク旗は、四季

11) イウィシの意味は不明である。おそらく「御衛士」のことであろう。

12) 今世紀の初頭あたりからトロイ・エジンの祭祀活動は没落の一途をたどった。特権階級のダルハトたちの貧困化は、清朝末期からの漢族の入植と草原開墾が、モンゴル族の生活の基盤を根本的に破壊したことを端的に物語っている。こうした背景のもとで、1928年の火事はさらに深刻な打撃をもたらしたにちがいない。

表2 文書集『成吉思汗八白室』に登場するトロイ・エジン関係のダルハトたちと継承人

| 年代       | 職掌                     | 人名                    |
|----------|------------------------|-----------------------|
| 1906     | Čingsang Irügelči      | Čoyijinjab            |
| 1907     | Čingsang Irügelči      | Čoyijinjab            |
| 1907     | Čing Kečiyeltü Qongjin | Seröndöntüb           |
| 1918     | ?                      | Vangjalnorbu          |
| 1918     | ?                      | Suvadi                |
| 1918     | Qongjin                | Seröbdöntüb           |
| 1918     | Čingsan Irügelči       | Čoyiji (njab)         |
| 1918     | Tayiši                 | Töbsinžiryal          |
| 1918     | Tayibu                 | Serengdönrüb          |
| 1918     | Mangnai                | Malhajib              |
| 1918     | Qon (g) jin            | Öyünbelig             |
| 1918     | Tuul                   | Žiryal                |
| 1918     | yalči                  | Arbinsang             |
| 1918     | Altan Šerbi            | Odyan                 |
| 1919 (?) | Žayisang               | Šanjimidub            |
| 1928     | Čing Kečiyeltü Qongjin | Seröbdöntüb           |
| 1928     | Žayisang               | Šanjimidub            |
| 1898     | Tayiji Žalyamji        | Vačirbatu, Čăyanbatur |
| 1922     | Tayiji Žalyamji        | Šajingerel            |

折々の祭祀に、「継承人」と称するチンギス・ハーンの直系末裔であるタイジ1人を派遣していた。この「継承人」はチンギス・ハーンの一族を代表する立場で祭祀に参列していた。

第三、トロイ・エジンの祭祀運営はつねにジノンの管轄下にあった。祭祀者ダルハトの人事移動などは、すべてジノンに掌握されていた。ジノンはまたヒツジの丸煮、乳酒などの供物を欠かさずに献上していた。ダルハトは祭祀活動の経過をジノンに報告していた。祭殿は数年に一度新装し、それを清める行事がおこなわれていた。この際、祭祀器具の運搬に使用する役畜等は旗政府が手配していた。

第四、トロイ・エジンの四季祭祀の名称は、チンギス・ハーンの八白宮の祭祀名称と同じである。八白宮祭祀の理論的根拠は、13世紀元朝のフビライ・ハーンが編纂しモンゴルの政治と宗教の運営を詳細に定めた、『十善白史』にあるとされている [LIU JINSUO 1981; 井上 1991: 71-83, 1992: 1-24; 楊 1995: 42]。トロイ・エジンの四季祭祀の名称は八白宮の四季祭祀とともに、『十善白史』にみられる「四季の宴」の名称と一致する。

第五、文書内容を整理したところ、トロイ・エジンのダルハトには8つの職掌があった。これらの職掌名はチンギス・ハーンの八白宮の祭祀を運営する「五百戸の黄色いダルハト」の一部の職掌名と同じである<sup>13)</sup>。同時にまた『十善白史』にみられる元朝宮廷の官員名とも一致する(3.4参照)。

このようにトロイ・エジンの祭祀は、清末、民国初期の時期に至ってもなお、モンゴルにおける政治の代表者であるジノンや旗王をはじめ、広くチンギス・ハーンの直系子孫ボルジギン一族と密接な関わりを維持していた。祭祀の名称と祭祀者の職掌の起源は『十善白史』に求めることができる。その意味でトロイ・エジンの祭祀はモンゴル全体の規模で強烈な政治色を保ちつづけていたのである。

### 3 ダルハトたちが伝えるトロイ・エジン祭祀の実状

現在、トロイ・エジンの祭祀活動にたずさわったことのある祭祀者ダルハトは、数少なくなっている。前章の歴史文書からうかがわれる清末、民国期の祭祀を、聞き取り資料その他によって再構成を試みたい。

#### 3.1 ダルハトたちとトロイ・エジン祭殿の移動

トロイ・エジンのダルハトであるウルグン・ダライ (Örgön Dalai 写真2) は、現在オトク旗ボロ・ホシュー郷のドスト川の北側に住んでいる(地図参照)。かれの話によれば、父親はタイポ(太傅)職であった。タイポはタイシ(太師)とともにトロイ・エジンのダルハトのなかでもっとも位の高い2つのポストである。ウルグン・ダライは14才のときに一度出家してラマ僧になったが、のちに還俗してダルハトを受けついだ。ダルハトに男子がない場合、同一父系親族集団の者が推薦され、ジノンの認知を経てダルハトになる。この情報は、前章の文書3の記録と一致している。

ウルグン・ダライの父親は最初オトク旗東部のジョソ(josod)に住んでいた。そのころ、トロイ・エジンの祭殿も近くに駐営していた。1930年ごろになると草原が入

13) 私の現地調査では、トロイ・エジンの祭祀者集団ダルハト内にある8つの職掌の相互間の上下関係を確認することはできなかった。しかし、八白宮の祭祀者集団「黄色いダルハト」の職掌名と一致している以上、「黄色いダルハト」の職掌の上下関係が参考になる。「黄色いダルハト」の場合、タイシは祭祀の主導者であり、タイポは祭祀の準備を主管する。祭祀の総合管理者はマンライで、祭祀における宴会や音楽を司るのはホンジンである。儀礼の進行を監督し、祭詞を唱えるのはグケーである。供物を献上するのがトゥールである。祭祀の順次を決めるのはハスハである。祭祀の酒を献上するのがチェルビである [NARASUN 1989: 25; SAYINJIR/AL & ŠARALDAI 1983: 432-440]。

植漢族に開墾されたため、ボロ・ホシューへ移動した。その際、ダルハトのオトク・ユルールチ職 (*otoy irügelci*) も一緒であったという。

もう1人のダルハト、バダマ (Badma 写真1) は、現在、シャル・ブリド (*šira būridü*) に住んでいる (地図参照)。より正確に言えば、1940年代からトロイ・エジンの祭殿が置かれていた小高い丘の南東約1kmのところに住居を構えている。バダマは最後のダルハン・カー職 (*darqan kiya*) をつとめていた。9才のときにオトク・ユルールチ職のチンバト (*Čingbatu*) という人物の弟子となり、22才でダルハン・カーになったという。ダルハトは、その修養にあたって、集団内の有能と認められた人の門下に弟子入りしていたことが分かる。バダマは、1943年に、祭殿を携えてシャル・ブリドへ移ってきたという。

バダマの記憶では、トロイ・エジンは、最初オトク旗とハンギン旗の境界に位置するドロソ・ホドク (*doloyan qudduy*) という地にあったという。ドロソ・ホドクとは「7つの井戸」という意味で、バダマは、そのためにトロイ・エジンの祭殿も「7つの主君」と呼ばれるようになったという。サインジャラガルとシャルダイも、調査で同じ情報を得ており、トロイ・エジンの祭殿は、このドロソ・ホドクの地にかなり長いあいだ祭られていたと記述している。ドロソ・ホドク周辺が入植漢族に開墾されたため、チャガン・トーリム (*čayan toyurim*) 近くのテメライ (*temegelei*) まで移動した。チャガン・トーリムに駐営していたころ、同治年間 (1862-1874) の回族の反乱に巻きこまれた [SAYINJIRJAL & ŠARALDAI 1983: 389-391]。バダマの話では、回族反乱のとき、ホイル・トロガイ・イン・シリ<sup>14)</sup> (*qoyar toloyai-yin šili*) に避難したが、回族反乱軍に放火されて、祭殿を失った。その際、祭殿内の御神体類は火打ち鎌の鉄部分だけが残ったという。こうした背景から、1950年代に共産党政府が成立するまでの祭祀器具と御神体類は、回族反乱の後に複製された可能性が高いと考えられる。その後一時ボロホンデ (*boroqongdai*)<sup>15)</sup>、そしてクメル (*kömel*) などの地を流転した後、最終的にシャル・ブリドに落ちついたのである。シャル・ブリドはオトク旗旗王の宮帳オールドが一時置かれていた地であり、旗王の近くが安全と考えていたのであろう。清朝時代、トロイ・エジンのダルハトのなかには、オールドスの西北に位置するアラシャン地域へ渡る者も現れたという [SAYINJIRJAL & ŠARALDAI 1983: 394]。

1940年代にトロイ・エジンのダルハトは全部で30数戸あった。バダマは私に、そのうちの19戸の戸主名をあげた (表3参照)。

14) 今のムクル・ソー (*muqur sayu*) で、漢語名は四十里梁である。

15) 今のウラーン・ジェリム (*ulayan jiegerem*) のジョソ (*josod*) あたりである。

表3 1940年代のトロイ・エジンのダルハトたち

| 人 名 (戸主名)              | 職 掌           |
|------------------------|---------------|
| 1 Čing Batu            | ユルールチ         |
| 2 Yangrung             | タイポ           |
| 3 Senggerinčin         | ザイサン (宰相)     |
| 4 Namjaldorji          | トゥール          |
| 5 Ayürzana             | タイシ (太師)      |
| 6 Bayan Dügüreng       | ザイサン (宰相)     |
| 7 Öljeikütüg           | ガルチ           |
| 8 Balyunjab            | アルタン・シェルビ     |
| 9 Odyonbayar           | アルタン・シェルビ     |
| 10 Nima (Balyunjab の兄) | ?             |
| 11 Gešigdalai          | ソラ・ダルハト (雑務役) |
| 12 Naran Dalai         | アルタン・シェルビ     |
| 13 Badamjab            | タイシ (太師)      |
| 14 Čögjüminsel         | ホンジン          |
| 15 Radnabanzar         | ?             |
| 16 Ĵalsang             | ?             |
| 17 Doγtuγu             | ソラ・ダルハト (雑務役) |
| 18 Čolo Bayatur        | ?             |
| 19 Möngkebuyan         | ?             |

### 3.2 トロイ・エジンの祭殿の形と御神体類

祭祀者ダルハトたちは、トロイ・エジンの祭殿をチョムチョク (*čomčoy*)、チョムチョク・オールドとも呼んでいる。かつて、トロイ・エジンの祭殿は2つのつながったテントからなっていたようである [SAYINJIR/AL & ŠARALDAI 1983: 391]。ダルハトのバダマによると、1956年までの祭殿は、南北にやや長い四角い形をし、厚さ約 10 cm の木板でつくった建築であったという。木板のうえには二重のフェルトと黄色い絹布が覆い、雲紋 (*uyalja*) の装飾があった。四角い木造建築を分厚いフェルトで覆うと、「四角くて丸い祭殿」になる、とダルハトたちが表現する。祭殿の内部には赤い絹布を掲げていた。祭殿は8つのハナ<sup>16)</sup>の大きさであった。

バダマは、トロイ・エジンの御神体は長さ約 33 cm、厚さ約 7 cm くらいの鉄製の火打ち鎌 (*gete*) であったという。ウルグン・ダライも同じ情報を提供している。た

16) ハナとは、テント (*ger*) の壁となる木製骨組のことである。ハナはおりたたみ式になっており、テントの大きさは、ハナの数で表現される。かつて普通の庶民のテントは、ハナ4つから6つまでであったが、チンギス・ハーン一族の者は、ハナ8つのテントを持つことができた。

だウルグン・ダライは、火打ち鎌は銀製のものであったという。かつてウルグン・ダライがラマ僧から還俗してダルハトにもどるとき、この火打ち鎌で頭に火花を飛ばした。ダルハトたちがモンゴル各地を巡回するときも、この火打ち鎌を持参する。祭祀に直接参加できるのはモンゴル人男性で、女性たちは祭殿の南東50～60歩離れたところで遙拝する。ダルハトの1人が火打ち鎌を持っていき、女性たちに火花を飛ばして祝福する。

ウルグン・ダライは、バダマとは異なる情報を述べている。それは、トロイ・エジンの祭殿には火打ち鎌のほかにもうひとつの御神体として、スウルデ（三叉）があったという。長さ約66cmの、竿の先端部に北斗七星の配置と同じように7つの銀釘を打ちこんだものであった。モンゴル人は北斗七星をドロソ・ブルハン（7つの神）と呼ぶ。トロイ・エジンをドロソ・エジン（7つの主君）とも呼ぶようになったのはそのためであると主張する。

火打ち鎌とスウルデ以外に、貴重な祭祀器具として、楽器チャルキ、銀製鍍金の男性用の帯飾り (*tuuqai*)、チンギス・ハーンの肖像画<sup>17)</sup>、トロイ・エジンの肖像画などがあった。火打ち鎌とスウルデ、それに各種の金銀祭祀器具はすべて祭殿内の箱 (*günggaraba*) のなかにあったという。

### 3.3 火打ち鎌：拝火祭からの視点

#### 3.3.1 末子と火

火打ち鎌は、発火道具であり、これを御神体とすることは、火に対する特別な信仰を物語っている。ダルハトたちは、火打ち鎌はトロイ・エジンを象徴するものであるという。モンゴルでは、末子のことを「オトゴン」(*odyon*) という。オトとは「火」のことで、オトゴンとは「火を守る人」の意味である。ペルシアの歴史家ラシード・アッディンは『集史』のなかで、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンについてつぎのように言及している。モンゴル人とチュルク人には、みなこのような習慣がある。

(親が) まだ生きているあいだに息子たちがつぎつぎと独立していく。息子たちにはそれぞれ財産を与えるが、残った財産はすべて末子に属する。末子は「オチギン」(すなわち現代語の「オトゴン」と呼ばれ、これは火と炉に関わる息子であり、「家の根本」である、という [拉施特 1985: 196-197])。

このような一族の象徴<sup>18)</sup> としての「炉」(*yolumta*) について、モンゴル語にはつ

17) 肖像に描かれたチンギス・ハーンは、尖った帽子をかぶり、顎髭をはやしていた。

18) 炉と火は人々の住居の中心に据えられ、生活用の火として、家族的生活の編成の要、その



ぎのような表現がある。「炉を維持する」(*yolumta sakiqu*)とは、代々炉と火を継承することを意味し、「炉の維持者」(*yolumta sakiyçi*)は、すなわち財産の継承者である。「炉を壊す」(*yolumta balalqu*)とは、一族を滅ぼすことを意味し<sup>19)</sup>、「炉が黒くなる」(*yolumta qaralaqu*)とは、一族の没落を暗示する [ELDENGTEI & ARDAJAB 1986: 165; QURČABAĞATUR 1991: 7-8]。実際の日常生活のなかでも、モンゴル人は炉のなかの火が消えないように細心の注意をはらう。遊牧で移動の際も、火を慎重に運び、火に関する禁忌を堅く守る。

したがって、末子は「一族の根本」で、その一族は火によって象徴されていることを物語っている。火打ち鎌は、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンが「火と炉を守る」身分であることを示す御神体である。

### 3.3.2 拝火祭

モンゴル人は火 (*yal*) を「母」(*eke*) とみなし、「母なる火」(*yal eke*) と表現する。古くから伝わる火の祈禱文につきのような内容がある。

清らかで輝く性質を持ち

堅いもの (*qatayu*) を焼きください

暗闇を追いはらい

……

火打石を母に

鉄鋼を父に

……

雲を通す匂いを持ち

19) 安寧な存続の保証となる。社会的には、家族の結合をもたらす、性的分業の上では、男女の役割を規定していた。そして宗教的・象徴的には、火は神々と人間との仲介者であり、人の生活の場を「世界」につなぎとめる支柱と表象されていた。[清水 1974: 32]。

19) 『モンゴル秘史』には、一族を象徴する炉と火に関する興味深いエピソードがある。少年テムジン (のちのチンギス・ハーン) とハサル、ベクデル、ベルグータイはともにイエスゲイを父とする兄弟であるが、テムジンとハサルはともにホエルン母から生まれ、ベクデルとベルグータイは別の妃から生まれ、同父異母の兄弟である。かねてから4人のあいだにいざこざが多く、ついにテムジンとハサルがベクデルを射殺するが、その際、ベクデルは「私の炉を壊さないで、ベルグータイを見捨てないで」ということばを残す。このエピソードは従来から多くの研究者に注目されてきた。ホルチャバートルは別の拝火祭に関する論文のなかでつぎのように分析している。ベクデルとベルグータイは同じ母親から生まれ、ベルグータイの方が弟で、モンゴルの習慣では「炉と火の維持者」の身分である。「炉と火の維持者」が殺されたら、まさに家系の消滅ということになる。そのため「私の炉を壊さないで」とは、「私を殺してもいいが、炉と火の維持者ベルグータイを殺さないように」との希望を示したものである [QURČABAĞATUR 1991: 7-8]。

大地エトゥゲン (*etügen*) を通す威力を持ち

[NAMJILDORJI 1992: 349–350]

別の火の祈禱文ではまた大地エトゥゲンを「エトゥゲン母」と表現している [DAMDINSÜRÜNG 1982: 319]。八白宮祭祀の火の祈禱文では「エトゥゲン母を通す威力を持つ」とある [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 222]。ハルヴァによると、エトゥゲンは古代の突厥碑文にも現れ、元来モンゴル人の故土を意味し、火の祈禱文では「エトゥゲン母」という女性として登場する [ハルヴァ 1991: 225]。ブリヤート・モンゴルは、牝羊か牝馬、つまりメスの動物を火の供物とする。ハルヴァはこれによって「火の神」、「火の霊」は女性であることを暗示していると説明している [ハルヴァ 1991: 217–221]。現在、モンゴルでは「火の祭」、「拝火祭」(*yal-un tayily-a*) と呼ぶ祭が広くおこなわれている。陰暦11月23日もしくは24日の「拝火祭」のとき、同一父系親族集団の全成員が集まり、ヒツジの胸肉 (*ebčigü* 写真3) と脂肪で火を祭る。火を祭るときにはさまざまな色の布切で胸肉を飾る。これを「火の装い」(*yal-un emüsgel*) あるいは「胸肉の装い」(*ebčigü-ü emüsgel*) という [NAMJILDORJI 1992: 353–354]。「装い」(*emüsgel*) とは『モンゴル秘史』にもみられる表現で、元来は新婦が実家から持参してきて、義父や義母に捧げる土産を指していた [ELDENGTEI & ARDAJAB 1986: 224]。拝火祭の「火の装い」あるいは「胸肉の装い」に使用する布切は、女性たちが年はじめから裁縫をするたびに残しておくものである。モンゴルにおけるシャマンを意味するイトガン (*ituyan*)、オタガン (*odyan*) は、やはり火を意味するオト (*od*) ということばに女性名詞「ガン」(*yan*) をつけたことに由来するとの指摘もあり [QURČABA/ATUR 1991: 3]、一般の拝火祭は「母なる火」を強調する性質を持つ。また、一部の地域では拝火祭のときに長老が一族の系譜を唱え [QURČABA/ATUR 1992: 14]、祖先と火を結びつける要素が確認できる。

### 3.4 ヤムの権利を持つトロイ・エジンのダルハト

祭祀者のバダマらによると、自分たちの祖先はチンギス・ハーンの前白宮のダルハトと同じように「黄色いダルハト」で、元朝のフビライ・ハーンの前白宮のときに、世襲制のダルハトに任命されたという。清朝時代の半ばごろ、トロイ・エジンのダルハトはオトク旗のイケ・ハラという行政組織に編入された。そのため、かれらはまた「ホシュー・ダルハト」すなわち「旗ダルハト」とも呼ばれるようになった。本来はどの旗にも属さない独立集団であったという。サインジャラガルとジャラルダイもトロイ・

エジンのダルハトはおそらく「五百戸の黄色いダルハト」から分離した祭祀者集団であろうという [SAYINJIR/AL & ŠARALDAI 1983: 393]。

祭祀者のバダマとウルグン・ダライらは、トロイ・エジンのダルハトに、かつては以下8つの職掌があったという。それは、アルタン・シェルビ、マンナイ、ザイサン、ダルハン・カー、オトク・ユルールチ、トゥール、ガルチ、ホンジンの8つである。この8つの職掌からなるダルハトたちはさらに2つのゲシク (*kešig* 後述参照) に分かれ、アルタン・シェルビ、マンナイ、ザイサン、ダルハン・カーはタイシ (太師)・ゲシクに属し、その他はタイポ (太傅)・ゲシクの所属であった。ダルハト同士は互いを「ゲシクの兄弟」 (*kešig-ün aq-a degüü*) と呼びあっていた。

文書に記録されているトロイ・エジンのダルハトの8つの職掌名と、祭祀者のバダマらのあげている職掌名は、いずれも『十善白史』の官員名と一致する。アルタン・シェルビは、アルタン・チェルビとも発音し、チャルキ (*čaryi*) という祭祀用楽器を奏でる人の呼称である。『モンゴル秘史』では「女官名」として現れ [ELDENGTEI & ARDAJAB 1986: 314–315, 332, 583–584, 764, 888]、のちに「千戸長」などの軍官名ともなっている [額爾登泰他 1980: 314; LIU JINSUO 1981: 130]。マンナイを『十善白史』ではマンライ (*manglai*) と表記している [LIU JINSUO 1981: 83]。ザイサンとは「宰相」のことで、元朝のときは、主として大ハーン朝見の儀式や勅文の翻訳にたずさわる役であった [LIU JINSUO 1981: 131]。ダルハン・カーとは「ダルハン」(免税者)の称号を持つカーの意味で、カーとはハーンの親衛部隊の長官であった [LIU JINSUO 1981: 132]。オトク・ユルールチについては4.1.1で述べる。トゥールを『十善白史』ではトゥールチ (*tuyulci*) と表記している [LIU JINSUO 1981: 88]。トロイ・エジンの祭祀において、トゥールは儀礼の進行を監督する役をつとめていた。ガルチとは火をあつかう役である。ホンジンは元朝時代のもっとも重要な大臣で、各種儀礼を司る役でもあった [LIU JINSUO 1981: 34–35, 129–130]。

ダルハトたちからの情報を総合して検討したところ、トロイ・エジンのダルハトたちの社会構造は、以下2つの点でチンギス・ハーンの八白宮の祭祀を運営する「五百戸の黄色いダルハト」たちと共通している。

第一、「五百戸の黄色いダルハト」たちと同じく、ゲシクにもとづいて組織されていた。ゲシクとは、モンゴル語で「恩賜」を意味し、古代チュルク語では「当番」や「宿直」の意味で、チンギス・ハーンの親衛部隊を指していた [杉山 1992: 79–80]。「五百戸の黄色いダルハト」はチンギス・ハーンの親衛部隊ゲシクの子孫であるという意識を強く維持している [楊 1995: 32–34]。

トロイ・エジンのダルハトは、全員がウルルグートという父系親族集団 (Örlögüd oboy) である。ウルルグートとは、「将軍たち」の意味である。『十善白史』には「九人の将軍たち」とあり、「大ハーンにもっとも忠誠心を持つ側近」を指していた [LIU JINSUO 1981: 88, 131]。

第二、トロイ・エジンのダルハトたちは、「五百戸の黄色いダルハト」たちと同じように、ヤムタト (*yamutad*) と自称する。ヤムタトとは、ヤム (*yamu* あるいは *yama*) を有する人びととの意味である。ホルチャビリクによると、ヤムとは「食べ物」を意味する古代チュルク語であり、八白宮の祭祀では大ハーンの恩賜としてダルハトたちに与えられる [QURČABILIG 1993: 62–64, 1994: 40–47]。祭祀者のバダマらは、ヤムとは「尊い食べ物」であると証言している。トロイ・エジンのダルハトたちは8大ヤムタトからなっていた。

ヤムの実体は、ヒツジの肉であり、祭の終幕としてダルハトたちに分け与えられる。献上された丸煮の数と関係なく、あくまでも1頭のヒツジの各部位を「古くからのしきたり」にしたがって分配する。ヤムの分配 (*tügegekü*) はトゥール職が担当する。職掌名を呼びあげ、呼ばれた者はひざまずいて受けとり、持ちかえって食べる。バダマによると、8大ヤムタトに分け与えていたヤムの部位は以下の通りである。

#### タイシ・ゲシク：

アルタン・シェルビのヤム：裸のハ (*suyuldur qa*)

マンナイのヤム：ドムダ・チュムグ (*dumda čimöge*)

ザイサンのヤム：胸椎 (*seger*)

ダルハン・カーのヤム：裸の大腿 (*suyuldur yuya*)

ここで、「尊い食べ物」ヤムとして分配されるヒツジの各部位について、説明しておきたい。ハ (*qa*) とは、ヒツジの前肢の一部を指す。これには橈骨 (*boytu čimöge*)、上腕骨 (*dumda čimöge*)、肩胛骨 (*dalu*)、肋骨 (*qabisu*) などが含まれる。ヒツジ1頭に2つのハがある。ハにドゥルベン・ウンドゥル (*dörben ündür* 「4本の高い肋骨」) という首に近いところのもっとも長い4本の肋骨 (写真4) が含まれると、ブトゥン・ハ (*bötün qa* 「完全なハ」 写真5) といい、肋骨が入らないのは「裸のハ」である。

モンゴル語でドムダ・チュムグと呼ぶ骨は、ヒツジの上腕骨と大腿骨を指し、4肢

合計4つある。マンナイのヤムは、前肢のを指すか後肢のを指すか不明である。

ヒツジの後肢の一部、大腿をグヤ (*yuya*) という (写真6)。これには脛骨 (*šay-a čimöge*) と、大腿骨 (*dumda čimöge*)、脛骨 (*següji*) が入る。脛骨が入らないのは、「裸の大腿」である。

### タイボ・ゲシク：

オトク・ユールチのヤム：肩胛骨 (*dalu*) と橈骨 (*boytu čimöge*)

トゥールのヤム：ハの上腕骨 (*qa-yin dumda čimöge*)

ガルチのヤム：頸 (*küjügüü*)

ホンジンのヤム：不明

八白宮の祭祀においても、祭祀者ダルハトにヤムが分配される。サインジャラガルとシャラルダイは、ヤムの分配に触れた際、つぎのように主張している。ヤムの分配はただ単に肉を分けあって食べるということではない。ヤムは、モンゴルの古くからの祭祀活動、モンゴルの父系親族集団 (*oboy*) の社会構造、ダルハトという集団の形成を研究するうえで重要な手がかりである、という [SAYINJIRAL & ŠARALDAI 1983: 212-213]。

## 3.5 トロイ・エジンの祭祀

### 3.5.1 祭祀の期日と名称

祭祀者のバダマによると、陰暦の毎月3日に「小祭」(*baya takily-a*) があり、これをダルハトたちだけでおこなっていたという。ヒツジの丸煮をひとつ献上する。正月1日の祭にはオトク旗の任命した継承人が丸煮をひとつ持ってくる。継承人は、チンギス・ハーンの直系子孫たちを代表して、ダルハトとともに祭をおこなう。陰暦3月21日は「口枷の参拝日」(*šörge-yin mörgül*) で、継承人が参加し、ダルハトの方からヒツジの丸煮をひとつ献上する。陰暦5月15日は「仔ウマの祭」(*unaya-yin takily-a*) で、ふたたび継承人とダルハトが共同でおこなう。陰暦の10月12日は「湖の参拝日」(*nayur-un mörgül*) で、継承人が参加する。以上から、いずれの祭祀においても、チンギス・ハーンのボルジギン一族を代表する継承人は欠かせない存在であったことが分かる。

### 3.5.2 「天のことば」に集約される秘密性

祭祀者バダマは、一連の祭祀のうち陰暦3月21日の儀礼順番を以下の要領でおこなうと述べた。

祭は午前10時ごろからはじまる。まず丸煮を祭殿のなかのトロイ・エジンの前に献上する。香を燃やし、ダルハトと継承人がひざまずいて「主の賛歌」(*ejen sang*)を朗唱する。つづいて祭殿の外へ出てタイラカ (*tayily-a*) と呼ぶ儀式をおこなう。タイラカとは「祭祀」の意味である。この際「十二の歌」(*arban qoyar dayu*)を歌う。バダマの話では、「十二の歌」はまた「天の歌」(*tengri-yin dayu*)ともいう。これには1)「大モンゴル」(*yeke mongyol*), 2)「小モンゴル」(*baya mongyol*), 3)「ウイェ・ウレベ」(*üye ülebe*), 4)「エレ・オーライ・エーデン・ジキジャイ」(*ele oolai eeden jikijai*), 5)「アタラ・エリケ」(*atala elike*)などが含まれる。3), 4), 5)のタイトルはなにを意味するか、祭祀者のバダマにも理解されていないという。「十二の歌」は「天のことば」(*tengri-yin kele*)で祭祀用楽器チャルキに書いてあり、アルタン・シェルビがチャルキを鳴らしながら唱う<sup>20)</sup>。

「十二の歌」が響くなかで、継承人はチャク( *čayu* )<sup>21)</sup> と呼ぶ銀杯に酒を注いで3回トロイ・エジンに捧げる。捧げるときにガルチ(火をあつかう役)が儀礼用の絹布を肩にかけて継承人の後ろからついていく。この際、トゥールは大声で怒鳴ったりして儀式の進行を促す。継承人が酒を捧げているあいだは「天のことば」で唱われる「十二の歌」が、あたり一面に響きわたる。この儀式は約1時間つづく。

20) 「天の歌」のなかで、バダマの記憶している「大モンゴル」と「小モンゴル」は以下の通りである。

大モンゴル

.....

*eliye laluu eyiyöläü, huhaa jahi jügei yoha,  
ayihalalar luhai ohuhai yujia, vohai huluu,  
lielü lielü lielü lei, ya yüei yuha,  
ayi halar luha, huu liü jia,  
vohai huluu, lia lia, ei!*

.....

小モンゴル

.....

*elilüü lielü, oohai viveleve,  
elhilüü aha, ahla lielü lie jia,*

.....

チンギス・ハーンの八白宮の祭祀においても「十二の歌」が唱われる。この「十二の歌」はまた「チャルキの歌」ともいい、その意味は解説されていない [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 165-166]。

21) チャクとは、銀製の船の形をした皿に2つのつながった杯を固定させた祭祀用酒具である。

この後ふたたび祭殿のなかに入り、トゥール職がウチュク (*öcüg*) を詠む。バダマがいうには「ウチュクとはチンギス・ハーンの生涯を語る歴史であり、秘密を守ることが大事だ」という。トゥール職は供卓の下にもぐりこんで、ほかの人びとに聞きとれないようにウチュクを詠み、一同はひさまずいて聴く。バダマはさらに「秘密の祭祀を公然とおこなっても、秘密が洩れないように工夫する必要がある」と強調する。ウチュクの後にはダータカル (*dayadqal*) を詠む。ダータカルとはチンギス・ハーンに祈願することであるという。そしてもう一度丸煮と香を献上する。

つづいてダルハトたちがヤムを分けあう。ダルハトたちがヤムを分配した後は一般の参拝者たちにゲシク (恩賜) を分ける。一般の参拝者たちに分け与えるのはあくまでもゲシクで、ヤムとは呼ばない。ヤムとは、祭祀者のダルハトのみがもらえる「尊い恩賜」を指すことが分かる。

夕暮れになると、チンギス・ハーンの八白宮が駐営する東のエジン・ホロー地方の方向に向かって供物トゥリシ (*tüleši*) を燃やす。この儀礼を「ガリルを燃やす」(*yaril-i tülekü*) という。

祭祀者のウルグン・ダライによると、ガリルは夕暮れに燃やすことになっていたという。祭殿から南西へ 1.5 km くらい離れた盆地で燃やす。これにはトロイ・エジンのダルハトが全員参加する。火を熾し、南西方向へ向かって献上された供物を少しずつ燃やす。火が消えかかると、一同がその場を離れる。全員一斉に「*erl jahui, erden jahui, erlee!erlee!*」と大声で叫びながらもどる。これもまた「天のことば」で、誰もその意味を解しない。祭殿にもどる際、ふりかえってはならないという禁忌があった。ガリルとは死者に「葬礼宴を設ける」(*kengšigüü tebikü*) ことであるという。

### 3.5.3 巡回

ダルハトたちは、毎年「湖の参拝」日の前に、各地を巡回 (*badar bariqu*) していた。オトク旗旗王の許可を得てからダルハトたちは2つの組に分かれて出かける。かつては、オルドス以外にチャハル、アラジャン、オラトなど広い地域を回っていたという。巡回に出かける際、御神体の火打ち鎌と楽器チャルキ、それにチンギス・ハーンとトロイ・エジンの肖像画を持参する。主として裕福な家庭を回る。牧民のテントに入ると、火打ち鎌と肖像画をテントの西北側 (ふだんは仏壇を置く場所) の骨組から掲げる。丸煮を献上された場合、その皮はダルハト個人の収入となる。牧民の多くは自発的に家畜を捧げる。

ウルグン・ダライは、1947年に数カ月間オトク旗の各地を巡回した経験がある。バ

ダマは1948年（戊子年）に祭殿を新しくするため、スミト、ブラク、チャガン・トロガイあたりを10数日間回った。その際、30～40頭のヒツジ、10数頭の大型家畜を集めたという。

## 4 トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連

トロイ・エジン祭殿とチンギス・ハーンの祭殿八白宮とには、それぞれのダルハトが独自に司る祭祀がある。これに加えて、年に一度、トロイ・エジンのダルハトが、八白宮に出向いておこなう祭祀がある。これが、ガリル祭 (*yaril-un tayily-a*) である。八白宮の諸祭祀のなかで、もっとも盛大におこなわれ、かつ重要な意義を有する祭は陰暦3月21日の「白い群れ祭」である [SAYINĴIRĀL & ŠARALDAI 1983: 118–241; 楊 1995: 44–46]。その前日の夜にガリル祭がおこなわれる。八白宮の祭祀を主宰する「五百戸の黄色いダルハト」は、ガリル祭に参加しないことになっていた。ガリル祭の舞台は八白宮の駐营地とその近くであるにもかかわらず、あくまでも遠くオトク旗から来るチンギス・ハーンの末子トロイ・エジンを祭るダルハトたちが中心となって運営するのが本来の形式であった。本章では、トロイ・エジンのダルハトが主宰するガリル祭について考察し、それによって、トロイ・エジン祭祀と八白宮との関連を明らかにする。

### 4.1 オトク・ユルールチ職とダルハン・カーの役割

ガリル祭でもっとも重要な役割を果たしているのは、オトク・ユルールチ職とダルハン・カーであるので、まずこの2人の祭祀者に注目したい。

#### 4.1.1 オトク・ユルールチ職の伝承

サインジャラガルとシャルルダイはその著書『黄金オールドの祭祀』のなかでつぎのように述べている。オトク・ユルールチ職とは、トロイ・エジンの祭祀者集団ダルハトのなかで、タイシ・ゲシクに属するホンジン職をつとめる人であったという [SAYINĴIRĀL & ŠARALDAI 1983: 132]。一方、トロイ・エジンの祭祀者であったバダマは、ホンジン職とオトク・ユルールチ職は別々の人であったという。トロイ・エジンに関する文書5でも、チンサン・ユルールチ職とホンジン職とはそれぞれ異なる人が担当していたことが分かる。チンサン・ユルールチ職とオトク・ユルールチ職が同一人物かどうかは判断の材料が乏しいが、ユルールチ職が2人いたという情報もない。



なぜオトク・ユルールチ職と呼ばれるかについて、サインジャラガルとシャラルダイはつぎのような情報を提供している。それは、オトク・ユルールチ職はオトク旗に住んでいたからそう呼ばれるようになったのではなく、トロイ・エジンを「ホーチン・タブン・オトク」(*qayučin tabun otoy* 旧い5つのオトク)という集団が祭っていたことから、オトクの名が付いたのである。いわゆる「旧い5つのオトク」とはオルドス部の別称であったとの証言もある [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 132-133]。「旧い5つのオトク」<sup>22)</sup>という集団の詳細は不明であるが、私は、調査でトロイ・エジンのダルハトはすべてウルルグートという父系親族集団であるとの情報を得た(3.4参照)。このウルルグート集団と「旧い5つのオトク」という集団とが、どのようなつながりを持つかも現時点では分からない。しかし、「オトク」という名称がトロイ・エジンと何らかの関連性があることは確かであろう。サインジャラガルとシャラルダイは、最後のオトク・ユルールチ職の名はチンバト (*Čingbatu*) であったという [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 133]。

私は、1996年にオトク旗に入り、オトク・ユルールチ職に関する情報を収集した。現在ボロ・ホシュー郷に住むボルジギン一族のアルタン・オチル (*Altanvačir* 1996年現在60才) 夫妻は、かつてオトク・ユルールチ職をつとめていたリンチン・ドルジ (*Rinčin Dorji*) の親族<sup>23)</sup>である。アルタン・オチルによると、1940年代まで生存していたチンバトは、最後のオトク・ユルールチ職ではなく、その息子のリンチン・ドルジが最後のオトク・ユルールチ職にあたるという。リンチン・ドルジは、モンゴル人からユルールチ・リンチンとも呼ばれていた。リンチン・ドルジは、1967年すなわち「文化大革命」が勃発した翌年に、政治的迫害を受けて服毒自殺したのである。

アルタン・オチルは1962年以前に一度リンチン・ドルジと一緒に八白宮のあるエジン・ホロー地方へ行った経験がある。オトク旗のボロ・ホシューからウマで5~6日間かけて旅をし、3月19日に八白宮の駐営地に到着した。

オトク・ユルールチ職は世襲制であった。アルタン・オチルは、オトク・ユルールチ職とはオトク・ダルハト (*otoy darqad*) を指すという。ただここでいう「オトク」

22) 中期モンゴルのオルドス部の諸オトク集団については、森川の論考がある。それによると、左右両翼に分かれていたオルドス部の左翼のなかに「ホーチン」(*Qayučin*)というオトク集団があった。「ホーチン」はまた複数形「ホーチト」(*Qayučid*)の形で現れる [森川 1973: 32-60]。おそらくこのホーチト集団であろうが、チンギス・ハーンの八白宮に十二瓶の貢物を負担していた [森川 1973: 32-60; RINTCHEN 1959: 91]。しかし、中期オルドス・モンゴルの「ホーチン」というオトク集団と「ホーチン・タブン・オトク」を結びつける資料はみつかっていない。

23) アルタン・オチルの夫人は、リンチン・ドルジ夫人の妹である。

はオトク旗を意味するのか、さらに別の意味があるのかは分からないという<sup>24)</sup>。

アルタン・オチルは、オトク・ユルールチ職は「チンギス・ハーンのために供物トゥリシ (*tüleši*) を燃やす人で、そのため毎年3月20日のガリル祭には必ず参加していた」という。この情報から、オトク・ユルールチ職は、供物トゥリシを燃やす義務を課せられた職掌であることが分かる。トゥリシとは、陰暦12月29日の夕暮れに、オルドス・モンゴル人が祖先の墓地のある方向に向かって燃やす供物類である。チンギス・ハーンの一部族が用意する供物トゥリシは、「黒い胸椎」(*qar-a seger*) と「黒い腰椎」(*qar-a niruyu*) とからなる。「黒い胸椎」とは胸椎の最後端の骨で、「黒い腰椎」とは、腰椎の最前端の骨であって、両者は連結している。

アルタン・オチルの話では、一般のオルドス・モンゴル人が自分たちの祖先に供物を燃やす12月29日のときでも、オトク・ユルールチ職はチンギス・ハーンの八白宮の方向に向かって供物を燃やしていた。火が灰になるまで待ち、灰のうえに「天のことば」を書いてもどることになっていたという。

オトク・ユルールチ職は、ガリル祭の主役で、その際「天のことば」を詠むという。「天のことば」は祭祀用楽器チャルキに書いてある。モンゴル文字で、チンギス・ハーンの命令を書いてあり、秘密を守るため、明瞭に詠んではならないという。アルタン・オチルは、「天のことば」の詠唱は、悔やみの性質を持つ行為で、ガリルとはすなわち「葬礼宴を設ける」(*kengšigüü tebikü*) ことを意味すると説明したうえ、この儀礼には自分たちボルジギン一族は参加しないことになっていたと証言する。葬礼宴を意味するケンシュー (*kengšigüü*) とは、元来骨を燃やして出る匂いを指す。祖先祭祀のときに供物を燃やすことを「ケンシューを出す (*tebikü*)」という。

オトク・ユルールチ職は、ガリル祭をやり遂げて3月24日にオトク旗に帰る。オトク旗に帰る際、祭祀に参加した謝礼として、ウルースン・シュー (*örögesün šigüsü*) が与えられる。これは「欠けた丸煮」、「片方の丸煮」、「奇数の丸煮」、「逆さまにした丸煮」の意味である。それは、「右側」(*jöb tala*) の前足と「左側」(*buruyu tala*)<sup>25)</sup> の後足の付いた、斜め半分に切った丸煮である。このような「逆さまにした

24) これは「オトク旗」という清朝時代以来の行政組織の名称とも関わる問題である。「オトク旗」のオトクとは、中期モンゴルのオトク集団に由来するとの説明が多い。しかし、中期オルドス・モンゴルは複数のオトク集団からなっており、清朝の支配下に置かれたときに一旗だけが「オトク」と呼ばれるようになったのは不自然な感じがする。オトク旗に住む別の老人が私に、「オトク旗」とは「オトゴン息子の旗」すなわち「火と炉を守る末子の旗」との意味であると説明した。ここでいう「オトゴン息子」とはチンギス・ハーンの子トロイ・エジンを指すものであるという。

25) モンゴル人はウマに乗る際、ウマの左側から乗る。このウマの左側を「右側」、「正しい側」と表現する。つまり、人間がいう「右側」とは、ウマ自身からすると身体の左側である。この表現はヒツジ、ヤギ、ラクダ、ウシにも共通する。

丸煮」はユルルールチ職にしか渡さないという。ダルハトのウルグン・ダライの話では、オトク・ユルルールチ職は祭殿のなかでもっとも権力を持つダルハトで、祭殿内の諸種の儀礼はすべてオトク・ユルルールチ職の指揮にしたがうという。祭殿の外に出るとタイシ（太師）が指揮をとるといふ。つまり、タイシがダルハト集団の長官であるのに対して、オトク・ユルルールチ職は、各種の儀礼を実質的に司っていた「儀礼進行の主役」であったと理解できよう。

オトク・ユルルールチ職は必ずチンギス・ハーンの末裔、ボルジギン一族の娘を嫁にする。結婚式の際、新婦を迎えにいく際には従者が武器を持ち、ボルジギン一族の者に会っても御辞儀しない特権を持っていたといふ<sup>26)</sup>。

#### 4.1.2 最後のダルハン・カー：バダマ

カーとは「従者」の意味で、「ダルハン・カー」とは、ダルハンの称号を有する従者との意味となる。カーは『十善白史』のなかでも官名として現れており、本来ハーンの親衛部隊の長官で、16～17世紀のモンゴルでは役人の爵号でもあったと解釈されている [LIU JINSUO 1981: 83, 132]。現在シャル・ブリドに住む最後のダルハン・カーであるバダマは（写真1）、ダルハン・カーはオトク・ユルルールチ職の専属従者であったといふ。バダマ自身、ダルハトとしての教養をオトク・ユルルールチ職から教わっていたことはすでに3.1で触れた通りである。

ダルハン・カーの主な仕事は、3月20日早朝の儀礼に使用されるウマの屠殺である。このウマは主としてウーシン旗から献上されることになっていた。3～5才くらいの牝ウマ (*bayidasu gegüü*) で、しかも妊娠していない牝ウマ (*qusarang gegüü*) でなければならない。もし妊娠した牝ウマを誤って使用した場合、ダルハトの責任者を25回鞭打ちしたうえ、3オウシ (*šidüleng*) 1頭の罰金が命じられるといふ。

ウマを屠殺する際、エジン・ホローのダルハトの「斧手」 (*sükečün*) がまずウマに御辞儀をして祝福 (*adis*) を乞い、そして斧でウマの額を強く叩く。ウマが倒れた瞬間に、ダルハン・カーがその喉を切る。バダマはこの作業を1946年、1947年、それに1948年の3回担当したといふ。ウマを骨の節目 (*üye*) ごとに解体して煮こみ、丸煮をつくる。ウマの丸煮に馬頭をのせて、昼ごろにチンギス・ハーンの祭殿に献上する。そしてダルハトたちには、ウマの肉のヤムが与えられる。ウマのヤムは肉だけで、骨

26) オルドスでは、結婚式の一環として、新郎が新婦を迎えにいく習慣がある。この際、新郎は自らの武器を持つ [QASBILIGTU 1984: 1-20]。ボルジギン一族は庶民の娘をもらうが、新郎は新婦を迎えにいかず、従者が代わりにいく。また、一般の牧民がボルジギン一族の者に会うと、御辞儀して敬礼することになっていた。

は含まれない。オトク・ユールチ職のヤムは肩胛骨である。ダルハン・カーのヤムは、胛骨 (*següji*) と大腿骨 (*dumda čimöge*) からなるムクル・グヤ (*muqur yuya*) である。モンゴル人は、肉のなかで肩胛骨をもっとも「尊い部分」とみており、ヤムの部位もまたオトク・ユールチ職の高い地位を示している。

#### 4.1.3 文書のなかのダルハン・カー

上述の『成吉思汗八白室』という文書集のなかにみられるオトク・ユールチ職に関する内容を、今のところ特定できていない。一方、ダルハン・カーについては若干の言及がある。そのうちもっとも古い文書は光緒29年(1903)のもので、下限は中華民国24年(1935)に至っている。以下ではダルハン・カーに関する記述を整理し、検討してみたい。

##### 資料1

「小部ダルハトのボディバンザル、バヤスホラン、ブルテゲン・ゲシク、ナムサライジャブ、チャガンウーバラに職務階級を授けた」(*bay-a darqad-un Bodibanzar. Bayasqulan. Bürüdgengešig. Namsarayjab. Čayanuuba. nar-tu tušiyal jerge olyuysan*) という光緒29年(1903)の文書には、小部ダルハトに属するブルテゲンという人物に、ダルハン・カーの称号が授けられたとある [NARASUN & ERDEMTÜ 1986b: 77-78]。小部ダルハトとは、チンギス・ハーンの軍神カラ・スウルデの祭祀を主宰するダルハトのことである。また「東部ダルハト」とも呼ばれる。小部ダルハトたちは、チンギス・ハーンの第2の功臣ムカリの部属であったという伝承がある [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 413-470; 楊 1995: 31]。

##### 資料2

「七旗にスウルデ・ゲゲンを招請する大・小両部ダルハトの名簿」(*doloyan qošiγun-dur sülde-yin gegen-i jalaqu yeke bay-a darqad-un ner-e-yin būridgel*) と題する光緒30年(1904)の文書には、4人のダルハン・カーの名前が載っている。そのうちハンギン旗とジュンワン旗へ派遣されるダルハトたちのなかに、小部ダルハトのダルハン・カーとしてナソンバト (*Nasunbatu*) をあげている。ウーシン旗とジャサク旗へ派遣されたダルハトのなかの、小部ダルハトのロブサンダルジャイ (*Lub-sangdarjai*) は、ダルハン・カー・ダーマルと称されており、もう1人のピレルー (*Pirlüü*) は役職のないダルハン・カーである。このロブサンダルジャイという人物はダルハン・カーであると同時にダルハトの責任者ダーマル (*dayamal*)<sup>27)</sup> でもある

27) ダーマル：「チンギス・ハーンの祭殿，カラ・スウルデ及びその他の主たちの祭祀に使用」

ことが分かる。ジュンガル旗とダラト旗へ派遣されたダルハトのなかに、ジンバ (Jimba) というダルハン・カーがいる。同じく光緒30年の「スウルデ・ゲゲンを多くの旗へ招請する件について」(*sülde-yin gegen-i olan qoşiyun-du jalaqu tuqai*) という文書にはまったく同じような4人のダルハン・カーの名前が書かれてあり、所属や派遣先とも同じである [NARASUN & ERDEMTÜ 1987a: 136-138, 1987b: 9-13], 4人のダルハン・カーはいずれも小部ダルハトに属していたことが明白になってくる。

### 資料3

「スウルデ・ゲゲンの威猛祭の件について」(*sülde-yin gegegen-i doyšiyulaqu tuqai učir*) という光緒30年(1904)の文書には小部ダルハトのダルハン・カーとして、ナソソバトの名前がある [NARASUN & ERDEMTÜ 1986a: 151-159]。資料2にあげた文書のなかにあるナソソバトと同一人物とみられる。

### 資料4

「小部ダルハトのエンケバヤル, ジグジジャブ, トゥメンジャラガルらに職務階級を授けた件」(*bay-a darqad-un Engkebayar. Jigjijab. Tümenjirgal nar-tu jerge tuşiyal olyuysan učir*) という光緒32年(1906)の文書には「小部ダルハトのジグジジャブにダルハン・カーの称号を授けた」とある。ジグジジャブという人物は、同時にまた役職を兼ねていた [NARASUN & ERDEMTÜ 1986b: 89-92]。以上の文書から、ダルハン・カーという称号は、小部ダルハトの者にのみ授けていたことが明らかである<sup>28)</sup>。

### 資料5

「小部ダルハトのオチル, リンチン, バトデレゲル, アルタンゲレル, ウルジバヤルらに職務階級を授けた件」(*bay-a darqad-un Vačir. Rinčin. Batudeleger. Altangerel. Öljeibayar nar-tur jerge tuşiyal olyuysan učir*) という光緒34年(1908)の文書には、小部ダルハトのオチルという人物に、ダルハン・カーの称号が授けられたと書いてある [NARASUN & ERDEMTÜ 1986b: 94-96]。最後のダルハン・カーであるバダマの祖父の名はオチルバト (Vačirbatu) である。バダマにこそ確認できなかったが、モンゴル人は日常的によく名前の一部を省略して呼びあう。上述のトロイ・エジンに関する文書のなかにも、チョイジンジャブという名前がときにはチョイジと略称されている

28) した銀両リスト」(*Činggis-un ongyun. qar-a sülde. el-e ejen nügüd-ün takily-a-yin mönggün-yi tungyaysan dangsa*) という文書には、ダルハン・カーであるダーマル・ルルマジャブの管轄する3つのゲシクという表現があり [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 111-133], ダーマルという役職は、ダルハトの内部で3つのゲシク集団を管理する権限が与えられていたと推測される。

28) ただし、これらの称号の一部は、各旗の旗王から授けられているものもある。

箇所がある(第2章 文書2, 3, 5参照)。時代的にも、この2人のオチルと名の人物が同一人物である可能性は否定できない。

#### 資料6

宣統2年(1910)の「ボクド・スゥルデ・エジン・ゲゲン, 八白宮の金銀祭祀器具のリスト」(*boyda sülde ejen gegen naiman čayan ordu-yin altan mönggün eldeb sang-un dangsa*)という文書のなかに、ダルハン・カーのアルタイ(Altai)という人物がチンギス・ハーンの白宮に銀製の灯明台(*čögüče*)を献上したとある。軍神カラ・スゥルデには、ダルハン・カーのジンバが、ハルハ西部の王公から集めた銀を捧げたという。「小手綱」(*bay-a jiloyo*)の白宮<sup>29)</sup>にはダルハン・カーのバーラン(Barang)らが銀碗を、ダルハン・カーのエンケトゥル(Engketörü)が銀製の灯明台を、ダルハン・カーのジンバが灯明台をそれぞれ献上したとある[NARASUN & ERDEMTÜ 1987b: 92]。このジンバは、先述の光緒30年の文書にみられるジュンガル旗とダラト旗へ派遣されていたジンバと、同一人物であると考えられる。

#### 資料7

宣統3年(1911)の「スゥルデ・ゲゲンについて」(*sülde-yin gegen-ü tuqai*)という文書には、ダルハン・カーのジンバは、アラジャン、エジネ・トルグート、ハルハ4部へ巡回に行くのに必要な証明書の交付をジノンに申請していることが書いてある[NARASUN & ERDEMTÜ 1987b: 57-59]。ダルハン・カーはほかのダルハトと同じように広くモンゴル各地を巡回していたことが分かる。

以上は清朝時代の文書で、つぎは中華民国時代に入ってからからの文書記録である。

#### 資料8

民国15年(1926)の「5つの白宮の珍品器具の詳細リスト」(*tabun ordun-yin erdeni-yin sang edelel-ün todorqai dangsa*)という文書には、「小手綱の白宮」に祭祀器具を献上した者のなかに、ダルハン・カーの称号を持つ者としてナソンバイル(Nasunbayar), チョロバートル(Čolobatur), エントゥル(Engtörü), ジンバ(Jimba), オラゴア(Olayuba)ら5人の名前があがっている[NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 171-182]。エントゥルはおそらくエンケトゥルの書きまちがいであろう。

#### 資料9

民国17年(1928)の「スゥルデ・ゲゲンを祭るため各旗のジャサクに同時に知らせ

29) 「手綱の白宮」は、八白宮のひとつであり、「大手綱の白宮」と「小手綱の白宮」からなっていた。いずれも、馬具を御神体として祭っていた[SAYINJIRJAL & ŠARALDAI 1983: 268-276; 楊 1995: 39-40]。

ること」(*sülde-yin gegen-i takiqu tuqai olan jasayud-tu nigen adali medegdekü tuqai učir-a*)という文書のなかに、小部ダルハトのチンサン(丞相)・ダルハン・カー・ダーマル・ウヌレーウーバー(*čingsang darqan kiya dayamal Önüreuuba*)という人物名がある。つまり、ウヌレーウーバーという人物はチンサン爵で、ダルハト集団内で役職(*dayamal*)についていたことが分かる [NARASUN & ERDEMTÜ 1986a: 58-60]。もうひとつの「スゥルデ・ゲゲンを祭る件」(*sülde-yin gegegen-i takiqu-yin učir*)という民国時代の文書<sup>30)</sup>にもまったく同様な表現がみられる [NARASUN & ERDEMTÜ 1986a: 60-62]。

#### 資料10

民国17年(1928)の「守護神スゥルデの吹き流しに使用する種雄馬及びその他の器具を造るために各旗から馬4頭を徴収する件について」(*sülde-yin šitügen-ü külege-yin ajary-a sang saba jasaqu morin-i qošiyu büri-eče dörbe abqu tuqai učir*)という文書には、新たに小部ダルハトに属するダルハン・カーで、ジュンネイ(*Jüngni*)という名前がみられるようになった [NARASUN & ERDEMTÜ 1986a: 72]。もうひとつの民国時代の「スゥルデ・ゲゲンを祭り、各旗へ巡回に行くことについて」(*sülde-yin gegen-i jiyşayan tayiju olan qošiyun-a jalarayulun yabuqu tuqai*)と題する文書には、ジュンワン旗とハンギン旗へ派遣されたダルハトのなかに、ダルハン・カーの称号を持つジュキニ<sup>31)</sup>という人物名があり [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 58-63]、おそらくジュンネイのまちがいであろう。また、以前も登場したことのあるチンサン・ダルハン・カーで、役職のダーマルの称号を持つウヌレーウーバーの名もある。いずれも小部ダルハトの所属である。

#### 資料11

民国20年(1931)の「カラ・スゥルデの5つのゲゲン・オールド内の珍品祭祀器具の明細リスト」(*qar-a sülde-yin gegen-ü tabun ordu-yin erdeni-yin sang edlel jüil üd-i nebçilen todorqayilan bayičayaysan dangsa*)という文書には、「小手綱の白宮」に祭祀器具を献上した者のなかに4人のダルハン・カーの名前がみられる。それはバーラン、エンケトゥル、ジンバ、それにオルゴア(*Olyuba*)の4人である [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 188-196]。オルゴアは恐らく資料8のオラゴアと同一人物であろう。

#### 資料12

民国壬申年(1932)の「ボクト・エジン・ゲゲンの八白宮内の金銀祭祀器具の明細

30) 文書の年月日は不明。

31) *Jükini, Rokini*とも読めそうである。

リスト」(*boyda ežen gegen-ü naiman čayan ordu-yin altan mönggün eldeb sang saba-yi neribčilen bayičayaysan dangsa*) という文書には、ダルハン・カーのアルタイが灯明台を献上したとある [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 140-149]。民国24年(1935)の「スゥルデ・ゲゲンの5つの白宮内の珍品器具の明細リスト」(*sülde-yin gegen-ü tabun ordu-yin erdeni-yin sang edlel jüil üd-i neribčilen bayičayaysan dangsa*) という文書にはバーランというダルハン・カーが再度登場している [NARASUN & ERDEMTÜ 1987c: 134-140]。

以上12の文書に登場したダルハン・カーの名前を整理したのが表4である。これを集計すると、30年間で計15人のダルハン・カーの名前が確認できる。これらの文書を検討したところ、以下の三点が明らかである。

まず、資料2, 3, 7, 9, 10は、チンギス・ハーンの軍神カラ・スゥルデの祭祀に関する内容が中心を占める。カラ・スゥルデの祭祀のうち、「12年に1度」辰年に、「血祭」がおこなわれる [SAYINJIR/AL & ŠARALDAI 1983: 280-329]。また各旗に敵や干ばつなど非常事態が発生したときにも、カラ・スゥルデを招請して「血祭」をおこなう習慣があった [楊 1995: 46-48]。その際、各旗へ派遣されるダルハトの人数や職掌は明記する必要があった。そのうち、1904年に各旗に同時に派遣されたダルハトのなかに4人がダルハン・カーの称号を持っており、少なくとも同時に4人のダルハン・カーがいたことはまちがいない。文書7からみれば、この4人のうち1人は1911年にも巡回に出かける許可を申請していることから、当時まだ生存していたと考えられる。1928年になると、まったくちがう2人が登場してくる。この2人にいつダルハン・カー

表4 文書集『成吉思汗八白室』に登場するダルハン・カーたち

| 年代   | 人名   | 備考          |      |
|------|--|-------------|------|
| 1903 | Bürüdgen (gešig)                                 | Ĵimba は2回出現 |      |
| 1904 | Nasunbatu, Lubsangdarjai, Pirlüü, Ĵimba          |             |      |
| 1904 | Nasunbatu  |             |      |
| 1906 | ĴigĴijab   |             |      |
| 1908 | Vačir (Vačirbatu?)                               |             |      |
| 1910 | Altai, Ĵimba, Barang, Engketörü                  |             |      |
| 1926 | Nasunbayar, Čolobatur, Engketörü, Ĵimba, Olayuba |             |      |
| 1928 | Önüreuuba  |             | 2回出現 |
| 1928 | Ĵüngni (Ĵükini?), Önüreuuba                      |             |      |
| 1931 | Barang, Engketörü, Ĵimba, Olyuba                 |             |      |
| 1932 | Altai, Barang                                    |             |      |



の職掌が授与されていたかどうか、文書からは確認できない。

資料1, 4, 5はダルハトに職務階級を授与した内容となっている。1903年から1908年にかけて計3人にしか授与していない。

資料6, 8, 11, 12は八白宮、すなわちチンギス・ハーンの3つの白宮と軍神カラ・スウルデの5つの白宮とに収納されている、祭祀器具に関する調査リストである。資料6と12はチンギス・ハーンの3つの白宮とカラ・スウルデの5つの白宮を合わせたリストで、資料8と11はカラ・スウルデだけのリストである。いわゆる祭祀器具には、モンゴルの歴代王公が献上したものと、歴代ダルハトが徴収してきたものの両方が含まれている。調査は数年に一度の割合でおこなわれており、徴収者ダルハトの名前も重複して登場する。そのうち、1910年から1932年にかけてのリストでは、チンギス・ハーンの白宮とカラ・スウルデの両方に祭祀器具を献上しているダルハン・カーは、4人にとどまっている。一方、カラ・スウルデの5つの白宮の1つ、「手綱の白宮」<sup>32)</sup>に祭祀器具を献上しているダルハン・カーは、1926年から1931年までの短い期間中でも、リストに6人の名前が載っている。ダルハン・カーは「手綱の白宮」と比較的強い関わりを持っていたことが分かる。

つぎに、現在入手できる文書をみる限り、ダルハン・カーという職掌は、もっぱら八白宮と軍神カラ・スウルデに直接関わる文書のなかでしか確認できない。上記のトロイ・エジンに関係する文書のなかで、トロイ・エジンのダルハトたちの8大職掌を詳しく述べた文書5(2.1参照)のなかでもダルハン・カーは登場しない。文書5は、オトク旗旗王からハンギン旗旗王へ出された、トロイ・エジンの「駐営の禁地」についての公文書であり、ダルハトの職掌についても厳密性が要求される書類である。ダルハン・カーだけが記載漏れになるとは考えられない。したがって、ダルハン・カーは本来、トロイ・エジンのダルハトではない可能性が高い。

さらに、上にあげた諸文書のなかにも登場するダルハン・カーは、いずれも小部ダルハトに属すると明記されている。八白宮内の金銀祭祀器具については数回にわたる詳細な調査がおこなわれ、リストがつくられている。これらのリストを検討したところ、ダルハン・カーがモンゴル各地を巡回して徴収してきた器具は、八白宮のひとつ、「手綱の白宮」に納められていることが多い。さらに、この「手綱の白宮」は八白宮のなかでも「スウルデの5つの白宮」のひとつであることも上記文書のなかで明記されている。したがって、ダルハン・カーは小部ダルハトのなかでも、とくに「手綱の白宮」の祭祀にたずさわる職掌であった可能性が極めて強いと判断できる。

32) 正確には、「小手綱の白宮」である。

ここで、ダルハン・カーが何故「トロイ・エジンのダルハト」と称するようになったのかを検討する必要がある。「ボクドの八白宮の警備について」(*boyda-yin naiman čayan ordun-u sergeyilelte-yin tuqai*) という宣統4年<sup>33)</sup>(1912)の文書は、ダルハトの長官に出された命令文である。それにはつぎのような内容がある。ダルハトの一部が八白宮のあるジュンワン旗のエジン・ホロー地方を離れて、豊かなウーシン旗とオトク旗の西部地帯に移り住み、ついにチンギス・ハーンの祭祀活動にも度々欠席するような者が増えた。このような移住者を一日も早く八白宮の近くへ連れもどすよう、という口調の強い令状である [NARASUN & ERDEMTÜ 1987b: 133-136]。清朝末期からオルドス各旗の草原が入植漢族に開墾され、ダルハトの故郷エジン・ホロー周辺も、これを免れなかった。大量の漢族農民の進出にともない、生活の基盤を失ったダルハトたちのなかには、当時まだ漢族の少なかったオトク旗やウーシン旗へ移住する者が多かった [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 468-470]。ダルハン・カーの1人が、草原開墾の時期に八白宮を離れて、昔から祭祀活動上緊密なつながりを持っていたオトク旗内に住むトロイ・エジンのダルハトたちを頼って移住した。移住したさきで、トロイ・エジンの祭祀活動により一層積極的に関わるようになり、ついに「トロイ・エジンのダルハト」と称するようになったのであろう。

以上、ガリル祭の主役をつとめるオトク・ユルールチ職とダルハン・カーの背景について、文書と伝承にもとづいて述べた。つぎはかれらの主宰するガリル祭について考察する。

## 4.2 ガリル祭

ダルハトのバダマは、ガリルの語義を知らないが、「ガリルに行くことはすなわち供物トゥリシを燃やしに行くこと、供物トゥリシを燃やしに葬礼宴に行くことだ」と説明している。サインジャラガルとシャラルダイは、ガリル祭は「9の9(81)の悪兆 (*mayu iru-a*)」を退けるためにおこなうと、その儀礼の目的を説明している [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 134]。セールイスはジャムツァラーノの論文 [ЖАМЦАРАНО 1961: 194-234] を根拠に、ガリル祭はユルールチ職が主役をつとめる一種の占いの秘儀であるという [SERRUYS 1984: 32]。小長谷は、家督を象徴する「炉」の祭で、一種の火祭であるという [小長谷 1989a: 39]。シャブロスは、モンゴルの招

33) 宣統は、清朝最後の皇帝溥儀の年号である。溥儀は宣統3年すなわち1911年に退位し、中華民国時代となるが、この文書をみる限り、当時オルドスでは、翌年でも依然として宣統という年号を使用していたことが分かる。

福儀礼に関する研究のなかで、3月20日の夜におこなわれる「ガリルの招福儀礼<sup>34)</sup>」をとりあげた際、ガリル祭とは「チンギス・ハーンの末裔たちが主宰するプライベートな儀礼」であると指摘している [CHABROS 1992: 113]。

#### 4.2.1 ガリル祭の火

ガリル祭は陰暦3月20日の夜、すなわち春期大祭である「白い群れ祭」の前夜祭としておこなわれる。サインジャラガルとシャラルダイは、このガリル祭に八白宮の祭祀者集団である「黄色いダルハト」やチンギス・ハーンの直系子孫ボルジギン一族が参加しないことを強調しながら、比較的詳しい記述を残している [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 132-140]。現在ではオトク・ユルールチ職が1967年に死去し、後任がなく、ダルハン・カーのバダマもさまざまな理由で祭祀に参加できないことから、ガリル祭はもっぱら八白宮のダルハトたちが代行している。私自身が1992年にダルハトたちの特別の配慮を受けてガリル祭に参加した際も、「黄色いダルハト」たちは、ガリル祭は本来自分たちがおこなう儀礼ではないことをとくに強調した。以下ではサインジャラガルとシャラルダイの記述を参考に、私自身の調査、それにダルハン・カーであったバダマからの聞き取りにもとづいてガリル祭について考察する。

20日の祭祀はまずヒツジの丸煮8とウマの丸煮1からなる「9の丸煮」を献上することから始まる。サインジャラガルとシャラルダイはまず『祭の順次』(tayily-a-yin

34) ガリル祭の一環として、招福儀礼がある。サインジャラガルとシャラルダイは、ガリル祭の招福儀礼はオトク・ユルールチ職らが出発してから八白宮の駐営地でおこなわれるという。それは、まず「チンギス・ハーンの招福用の桶」にアムス (*amusu*) を入れる [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 139]。アムスとはヒツジの煮汁にバターや黒砂糖を加えた炊きこみご飯である [小長谷 1989a: 45]。祈禱用のヒツジの後ろの小腿も桶に入れる。桶を祈禱用に屠殺したヒツジの毛皮に載せて、4人のダルハトが運ぶ。上下に動かし踊るように福を招く。普通の招福儀礼では「ホリー」、「ホリー」と唱和するが、ことにガリル祭の招福儀礼では「ホリー」と唱和するのを堅く禁じている。特別の「ガリル祭の招福の歌」を唱うのである [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 139]。

ガリル祭の招福儀礼と普通の招福儀礼との異なる点はハの使用にある。オルドスでは普通の招福儀礼、たとえば陰暦11月23日あるいは24日の拝火祭の招福儀礼において、特別の「招福の矢」(*dalalyan sumu*) を使用する [NAMJILDORJI 1992: 377-380]。死者の招福儀礼のときには「左側」(*buruyu tal-a*) のハを使用する [SONOM 1993: 76]。ところが、モンゴルのドルベト部では拝火祭における招福儀礼のときにハが使われる [CHABROS 1992: 72-73, 87] が、そのハが「右側」か「左側」かは不明である。ガリル祭では家畜の「右側」のハを使用する。ハのなかでとくに重要な部位のひとつが、チャー・チュムクという脛骨である。したがってハに注目する際、チャー・チュムクを忘れてはならない。祖先祭祀の供物にもチャー・チュムクが入る。モンゴルのオイラト部では、チャー・チュムクは父系親族集団を想起させる象徴的機能を有している [CHABROS 1992: 70]。つまり、ヤス (*yasu*) =骨であるという点で、ヤスという、モンゴルの父系親族集団を意味する概念と結びついている。なお、チャー・チュムクは、脂肪尾とともに神 (*burqan*) を祭るときにも利用される [QURČABILIG 1995: 9-14]。

darumji) という写本に注目している。それにはつぎのような指針的内容が書いてある。

3月20日の祭は以下の通りである：まず儀礼用の絹布を献上する。灯明を献上する。香を献上する。酸乳と乳酒を3回献上する。(乳の)振りまきをする。イケ・エジンのオルドの扉を閉めて鍵をかけ、オルドを3の9(27)回廻ってきて、ふたたびオルドの扉を開けてなかに入り、灯明を献上する。香を献上する。松明を灯してガリル祭に出かける。ガリルを燃やす3つの火は松明で熾す。ガリルの火で儀礼用の「9の堅いものの丸煮」を燃やす。9尊の乳酒を献上して「ガリルの金書」を詠む。右側のハ(3.4参照)と脂肪尾、胃、回腸を桶に入れてガリルの炉を3回廻って、松明の残りを持って《ガリルの歌》を歌いながら戻る。燃え残った松明を持ちかえて、イケ・エジンの炉のなかに入れる [SAYINĪIR/AL & ŠARALDAI 1983: 133]。

ここでいうイケ・エジンとは「大主君」の意で、イケ・エジンのオルドは明らかにチンギス・ハーンとその第一夫人ボルテの祭殿を指している。ガリル祭で重要な儀礼のひとつは、「堅いもの」と呼ぶ供物を燃やすことである。このときに使用する火は、チンギス・ハーンの祭殿から持ちだした松明であり、そして火はふたたびチンギス・ハーンの炉に還元される。

「炉と火の主」と呼ばれる末子の祭祀者によって持ち出され、そしてまたチンギス・ハーンの炉に還元される火は、まさにボルジギン一族の命脈を象徴するものである。

#### 4.2.2 「堅いもの」：ガリル祭の供物

バダマによると、ガリル祭のときに火に燃やす「堅いもの」と呼ぶ供物は、分解していない乾燥させた丸煮であったという。「堅いもの」には仔ヒツジをよく使う。かつてこの「堅いもの」は、全モンゴルの各地から集めていたようであるが、のちにオルドス7旗が負担するようになった。7旗から献上されるヒツジの「堅いもの」の具体的な量は表5の通りである [SAYINĪIR/AL & ŠARALDAI 1983: 135]。一方、バダマの記憶している供物の量は表6<sup>35)</sup>である。

ヒツジの「堅いもの」は5の9(45)であった。そのうちチンギス・ハーンとボルテ夫人に3の9(27)を、クラン妃とグルベルジン妃にはそれぞれ1の9(9)の「堅

35) バダマの記憶では、1940年代に各旗から献上される「堅いもの」などの祭祀用品は表6の通りである。サインジャラガルとシャルダイの記述に比べると、供物の量が減少している。これは、1940年代になってから、社会の不安定などの原因により、財政不振に陥ったオルドス各旗からの供物が減少していたことを表している。

いもの」を捧げる。このほか、オトク旗は特別にガリル祭にウマの「堅いもの」1を献上する。ジュンワン旗は黄色い頭のヒツジの右側のハ、膀1、アマン・クジュー (*aman küjügüü*「口の頸」5.2参照) 1、炒ったキビ3升、儀礼用の絹布5を捧げる。ジャサク旗はクラン妃にウシの「堅いもの」1、ジュンガル旗はグルベルジン妃にウシの「堅いもの」1を捧げる [SAYINJIRAL & ŠARALDAI 1983: 135-136]。これは、ジャサク旗内のソロンゴス (*Solungyus*) という父系親族集団がクラン妃との関わりが深く、ジュンガル旗内にはかつてグルベルジン妃の白宮が置かれていた [SAYINJIRAL & ŠARALDAI 1983: 243-246, 251-253] ため、その深い関わりを示す特別の献上物であると考えられる。

「ガリル祭の9の堅いもの」 (*yaryl-un yisün qatayu*) は、以下の骨で構成されている。それは、すべての丸煮からアマン・クジュー1、黒い胸椎 (*qar-a seger*) 1、黒い腰椎 (*qar-a niruyu*) 1、橈骨 (*boytu čimöge*) 1、脛骨 (*šay-a čimöge*) 1、腰骨 (*söbege*) 3、膝の骨 (*toyiy*) 1、踵骨 (*borbi*) 1、尾骨 (*segül-ün yasu*) 1である [SAYINJIRAL & ŠARALDAI 1983: 136]。

4.1.1で触れたように、「黒い胸椎」と「黒い腰椎」は、オルドスのボルジギン一族が12月29日に祖先のために燃やす供物トゥリシである。ナラソンによると、供物トゥリシには脛骨も欠かせないという [NARASUN 1989: 290-292]。

すでに触れたように、普通の拜火祭の供物は胸肉と脂肪である。これは、さまざまな火の祈禱文のなかに、「火の母にし

表5 オルドスの7旗が負担していた「堅いもの」の量

| 旗名     | 堅いものの量 |
|--------|--------|
| オトク旗   | 5      |
| ウーシン旗  | 7      |
| ジュンガル旗 | 5      |
| ハンギン旗  | 7      |
| ジャサク旗  | 5      |
| ジュンワン旗 | 9      |
| ダラト旗   | 7      |

資料出典：『黄金オルドの祭祀』

表6 バダマの記憶にもとづく1940年代の「堅いもの」等の供物の量

|        | 堅いもの        | 乳酒 | その他 |
|--------|-------------|----|-----|
| オトク旗   | 5           | 2斤 |     |
| ウーシン旗  | 1 (ウマの堅いもの) | 1斤 |     |
| ジャサク旗  | ?           | ?  |     |
| ハンギン旗  | 3           | ?  |     |
| ジュンワン旗 | 3           | 1斤 |     |
| ダラト旗   | ?           | ?  |     |
| ジュンガル旗 | ?           | ?  | たきぎ |

て火のハーンに脂肪を捧げる」、「火の母にして火のハーンを脂肪で祭る」と繰り返して出てくる [DAMDINSÜRÜNG 1982: 318, 373, 382-383]。胸肉と脂肪のもっとも顕著な特徴は、その「柔らかさ」である。「女性的要素」の強い「火の母」には柔らかい供物を捧げるのに対し、末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちがチンギス・ハーン一族の諸祖先に捧げるヒツジの肉は、「堅いもの」と呼ばれる。上述の火の祈禱文では、「堅いもの」は火の威力を讃える表現となっている。火の威力を表す「堅いもの」を供物とすることによって、チンギス・ハーン一族の繁栄を象徴する火が、特別に旺盛な生命力を有していることを強調していると理解できよう。

#### 4.2.3 祈禱用ヒツジの役割

ガリル祭に出かける前に一連の儀礼がある。1909年から1910年にかけてオルドスを旅行し、八白宮に関する文書を多数収集したジャムツァラーノのコレクションにもガリル祭についての文書が確認できる。それはつぎのような内容である。

ガリル祭に出かける際、ジノンのバクシたちが酒1、酸乳1を持ってくる。徴収された祭祀用品はウマ1、ヒツジ1、酸乳2、酒2である。《ガリル祭のヒツジ》を（使って）祈禱し、屠殺して、ユルールチ職が占う儀礼がある。それ（すなわち肝臓類）をきれいに観察して、ウマとヒツジを煮る<sup>36)</sup> [RINTCHEN 1959: 87]。

文中のジノンの「バクシたち」とは、各種儀礼や文字を教える役、すなわちダルハト内の教育係であった [SAYINĴIRĀL & ŠARALDAI 1983: 450]。この「ガリルのヒツジ」を「ガリルの祈禱用ヒツジ」(*yiril-un šibšilgen qoni*)ともいい、生きたまま肝臓などを取りだして観察し、占いをする。ヒツジ占いは、チンギス・ハーンの八白宮祭祀の複数の儀礼においてみられる [SAYINĴIRĀL & ŠARALDAI 1983: 136; 小長谷 1989a; SERRUYS 1984: 29-62]。サインジャラガルとシャルルダイによると、ガリルの祈禱用ヒツジは、フェルトのうえに立たせて、背中に酸乳をかけて身震いをさせてガルチ<sup>37)</sup>が屠殺する。「右側のハ」を小腿 (*šiyir-a*) とともに煮る。このハをのちに

36) このテキストは、八白宮祭祀の進行に関する指針的内容が中心となっている。これらの指針的内容を現在の八白宮の諸儀礼とを逐次照らし合わせるのは困難であるが、ガリル祭についても言及箇所があり、ここではもっぱらガリル祭との関連性に注目したい。Rintchenはこのテキストに「白い群れ祭における（乳を）振りまく方法」(*čayan sürüg sačuqui yosun*)というタイトルを付けている。内容的には随所にガリルということばが現れており、「白い群れ祭」に関するテキストではなく、むしろガリル祭関係の文書であろう。

37) ガル (*yal*) とは「火」で、ガルチは火をあつかうダルハトである。

おこなわれる「ガリルの招福儀礼」(*yiril-un dalaly-a*)に使用する。肝臓、胆嚢、回腸を観察する。もし肝臓や胆嚢の色がよく、回腸に糞が満積していたら、よいとされる [SAYINJIRAL & ŠARALDAI 1983: 136–137]。

私の調査では、1992年陰暦3月20日のガリル祭の祈禱用ヒツジは、夕方5時15分にチンギス・ハーンの祭殿に入れられた。27分ごろにダルハトの1人が燃やしたハイマツの煙でヒツジを清め、つづいてジノンも同じ方法で清めた。そしてヒツジの頸に儀礼用の絹布を飾った。ダルハトは、チンギス・ハーンに現職のジノンの名を唱えて祭祀状況を報告する。ジノンはチンギス・ハーンに3回叩頭した。5時30分にヒツジを赤い絨毯のうえに立たせ、背中に酒と酸乳をかけた。つづいてダルハトは「右耳」(すなわちヒツジの左側の耳)に唇をあてて祈禱内容を話した。5時35分ごろ、ヒツジは赤い絨毯のうえに仰向けに倒され、腹を開けられ、肝臓と胆嚢が取り出された。ダルハトはそれを絹布で受け取り、人目を避けて祭殿の奥に入って秘密の占いをした結果、今年も吉との朗報が得られた。一連の儀礼はまさに小長谷の指摘通りに、ヒツジに託した祈禱がチンギス・ハーンに届けられ、チンギス・ハーンはそれをまたヒツジの肝臓などの部位を通して啓示する。このヒツジはいわばシャマンと同じく、昇天したチンギス・ハーンと人びとのあいだを仲介する役割を果たしている [小長谷 1989a: 41–46]。

#### 4.2.4 末子の高貴さと反日常による「あの世」への接近

オトク・ユルールチ職とダルハン・カーは、「チンギス・ハーンと諸祖先のために葬礼宴を設ける」人であるゆえに、威風堂々と行動しなければならないという。途中出会ったものから略奪することも許される [SAYINJIRAL & ŠARALDAI 1983: 137]。バダマの経験によると、陰暦3月20日にはすでにエジン・ホロー地方に大勢の参拝客が集まってにぎわっているが、夕方5時くらいになると、人びとはみんなテントにもぐりこみ、ガリル祭に行く祭祀者の行列に遭遇しないように注意する。ガリルに行く行列にあえば運が悪くなると考えられているからである。ひっそりとしたテント群のあいだに「ガリル祭の道」(*yiril-tu yabuqu jam*)が開通するという。

オトク・ユルールチ職は、ダルハン・カー、それにガルチらをはじめとする数人の従者を率いて、出発するときがくると、まず主殿にある箱 (*dorqon*) のなかから「天のことば」が書いてある『金冊』 (*altan debter*)<sup>38)</sup> を取り出して懐に入れる。この箱の鍵はつねにオトク・ユルールチ職が管理しており、かれ以外に『金冊』に触れる人

38) 『金書』 (*altan bičig*) ともいう。

はいない。ダルハン・カーは、オトク・ユルールチ職が乗るウマを、八白宮の主殿の入り口まで曳いていく。オトク・ユルールチ職は敷居に立ってウマに飛び乗る。一般牧民の日常生活では敷居を踏まないように注意をはらうが、チンギス・ハーンの祭殿の敷居に立つことが許されるオトク・ユルールチ職の特権は並々ならぬものであることが分かる。一行は踵で鐙を踏み、小指で鞭を持ち、人指し指で手綱を持つ。ウマの背中では左の脛に重心を置く。これらの行為はことごとく日常的に厳しく禁忌されていることへの「違反」である。ガリル祭において、オトク・ユルールチ職とダルハン・カーからはこのような反日常的な行動を公然ととることによって、末子トロイ・エジンに代表される高貴さを演出している。

ガルチは、事前に八白宮の東を流れるチャンホク河の北東の盆地に、ガリル祭の供物を燃やす場所 (*yarliy-un tüleši-yin yajar*) を決める。この場所はまた「ガリルの谷」 (*yaril-un soyu*) といい、八白宮の駐营地から871歩離れたところにある [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 138]。ガルチは、たきぎ (*jingsereg modu*) も用意しておく。このたきぎは、ジュンガル旗が用意して、エジン・ホロー地方に運んでくる。バダマによると、ガルチはジュンガル旗の人で、ダルハトであるという。サインジャラガルとジャラルダイの記述をみる限り、たきぎを用意していたのは、ジュンガル旗のオールドル河 (*oyudur-un yool*) に住む、「ガリルのジュム」 (*yaril-un jum-a*) と呼ばれていた人たちで、ダルハトであったかどうかは不明である。たきぎは傷や枝分かれのない「3の9(27)」本の榆<sup>39)</sup>であった [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 138]。オルドスでは、11月23日あるいは24日の拝火祭のときでも、包葉のついた榆の枝は欠かせない。拝火祭の祝詞には「榆のように多くの命を持ち」とある [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 222]。結婚式の際、新婦が火を拝むときに唱えられる祝詞にも「榆のような命を持ち」とある [DAMDINSÜRÜNG 1982: 318]。また別の拝火祭の祈禱文には「母は火打石、祖先らは榆の樹」とある [ハルヴァ 1991: 224]。榆には生命力と豊饒の意味を持たせていることが分かる。ガリル祭に使用する榆のたきぎには、バターがかけられ、燃えやすいようになっている [SAYINJIRĀL & ŠARALDAI 1983: 138]。

一行はガルチの案内で無人地帯に化した「ガリル祭の道」を通して「ガリル盆地」に着く。この際もオトク・ユルールチ職の特権がみられる。かれはウマから直接フェルトのうえに置いてある机のうえに降りてフェルトのうえに座る。地面に触れることはない。

39) ジャムツァラーノの文書には「斑点や傷のない3の9(27)本の柳」となっている [RINT-CHEN 1959: 87]。



ガリル祭は「聖なるチンギス・ハーンをはじめとする諸祖先に葬礼宴を設ける儀礼」である。ガリル祭で捧げられる供物を享受するのは、あの世に住むボルジギン一族の諸祖先である。供物を諸祖先の世界へ届けるためには、あの世に住む祖先に近づくことが必要である。ハルヴァによると、アルタイ諸民族は死者の世界においてはすべてがこの世と同じように営まれているが、ただひとつ、ことごとくこの世と逆さまになっているという。特別の太陽と月があり、太陽は西から出て東に沈む。この世とあの世は逆の関係にある、と考えられている【ハルヴァ 1991: 315-316】。4.2.5で呈示するガリル祭で唱えられる『金冊』にも「反対の月に、反対の日に」(*buruyu saran-a, buruyu naran-a*)との一句がある。ガリル祭に赴くオトク・ユルールチ職とダルハン・カーの一行は、この世での日常的な行動と逆の行動をとることによって、高貴さを誇示すると同時に、諸祖先の住むあの世へ近づこうとしているとも解釈できよう。つまり、オトク・ユルールチ職らはあの世へ接近できる特権をもまた、この世の人びとに誇示しているのである。

祈禱用ヒツジによる占いなど、これまでおこなわれた一連の儀礼は、いずれもあの世に住む諸祖先への接近を意識した行為である。上述の祈禱用のヒツジは、いわばオトク・ユルールチ職らの先導役でもある。ガリル祭に出発する前に、あらかじめ祭祀状況等を仲介者のヒツジに告げてから、オトク・ユルールチ職らが正式にあの世へ向かって近づいていくのである。

#### 4.2.5 「あの世」に住む諸祖先

ガリル祭の中心は「堅いもの」と呼ぶ供物トゥリシを燃やすことである。祭祀者のバダマの話では、「堅いもの」はフェルトのうえに積んでおき、ダルハン・カーがアマン・クジュー (*aman küjüüü*) と呼ぶ星形の模様を地面に描く。このアマン・クジューのうえに、ジュンガル旗から運んできた榆のたきぎを積む。アマン・クジューとは、直訳すれば「口の頸」との意味である。小長谷によると、頸椎の6つの骨のうち下顎骨にもっとも近いアマン・クジューは、頭部と胴体とをつないでいる最初の頸の骨である。この骨は家畜の魂の存在部分であろうと推測している【小長谷 1991: 305-306】。オルドスでは、アマン・クジューは「ヤマの4つの骨」(*yama-yin dörben yasu*) のひとつで、ヤマとは、すなわちヤム (*yamu*) とも発音し、「尊い食べ物」を意味する (3.4参照)。「ヤマの4つの骨」のなかで、アマン・クジューがもっとも重要である。オルドスでは、初冬の10月末から11月にかけて、越冬準備の一環として家畜の定期的屠殺がおこなわれる。その際、ウシを屠殺するにあたって、「祭祀鍋の肉」

(*takil toyuyan miqa*) を食べる習慣がある。この「祭祀鍋の肉」には必ずアマン・クジュー、短肋 (*boyuni qabisu*)、胸骨柄 (*büdürkei*)、サムサ<sup>40</sup>) (*samsay-a* あるいは *samsa*) など「ヤムの4つの骨」が含まれる。「祭祀鍋の肉」を食べた後、「ヤムの4つの骨」で火を祭り、「アマン・クジューの祝詞」を唱える。アマン・クジューなど「ヤムの4つの骨」はチンギス・ハーンや諸祖先に捧げる供物である [NAMJILDORJI 1992: 264–265; ЦОГЛАЙНАМЖИЛ 1984: 39]。大地に動物の魂が宿るアマン・クジューを描き、さらにそのうえで実物のアマン・クジューを燃やすことによって、供物が確実に祖先たちのところに届くように設定されている。

ガルチが火を熾す。サインジャラガルとシャラルダイによると、この際、南北方向で3つの火を熾し、もっとも北側の火はチンギス・ハーンとボルテ夫人のため、南へと順次クラン妃、グルベルジン妃のため火が設けられる [SAYINJIRGAL & ŠARALDAI 1983: 138]。一同は各旗から献上された「堅いもの」の肉を骨から剥す。バダマは、この際の雰囲気はきわめて厳粛で、悲しみに包まれているようになると強調する。「堅いもの」の骨を火に入れて燃やす。ときどき乳酒をかける。オトク・ユルルチ職は悲しんでいる表情で『金冊』を詠みあげる。

バダマは、この『金冊』はオルドス7旗旗王の「王系」と説明する。また、現職の7旗旗王の名も唱える。諸祖先の名を直接口にしてはならないことから、『金冊』ははっきり詠まないが、供物を捧げる立場にある7旗旗王の名は明瞭に詠むという。バダマを含め、トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちは現在誰も『金冊』を所持していない。サインジャラガルとシャラルダイの著書にも『金冊』は収録されていない。ブリヤート・モンゴル出身のディリコフが、1956年に八白宮を訪ねた際、当時オルドスの最高責任者であった馬富綱らの助力もあって、一般に公開しないとされていた数多くの文書を閲覧し、写しとっている [ДЫЛЫКОВ 1958: 228–229]。ディリコフは、のちに3つの文書を公開している。そのうち第一文書にあげているのが、『金冊』である。かれの記述によれば、『金冊』は10枚からなる中国製の紙に金で書かれ、黄色い絹布の表紙がついていた。保存状態が比較的よく、毎年3月20日、トゥリンという供物を燃やすときに詠むもので、チンギス・ハーンとその後継者たちを詠みあげる内容であるという [ДЫЛЫКОВ 1958: 229]。ディリコフはこの『金冊』がガリル祭で詠まれるとは書いていない。しかし、トゥリンという供物を燃やすときに使用すること、3月20日という期日から、ガリル祭の『金冊』であると断定してよいであろう。

40) サムサとは、腰椎の最後端の骨である。オルドス・モンゴル人は、サムサは腰椎と尾椎、それに2つの肋骨、この4つの骨をつなぎあわせる重要な骨であるとみている。

また、ジャムツァラーノの収集した文書をリンチンが整理して、1959年に公開したテキストのなかにも『金冊』が入っている<sup>41)</sup>。

以下ではガリル祭における葬礼宴の対象者たちを示すディリコフの入手した『金冊』をそのまま呈示する。尚、転写にあたって、もともとモンゴル文テキストにあった句読点は、その点の数に応じて：や：：のように表記する。

p 235

1 *Činggis qayan-a: Borte Jūsın qatun-a:*

チンギス・ハーンに，ボルテ・ジュシン<sup>42)</sup> 妃に

2 *Qulan qatun-a: Yisü qatun-a:*

クラン妃に，イエス妃に

3 *Yisügen qatun-a: Tegülün qatun-a:*

イエスゲン妃に，テウルン妃に

4 *Qoldui Yiryuyačın<sup>43)</sup> qatun-a: Joči*

クルドイ・イルグークチン妃に，ジュチ・

5 *ejen qatun köbegüd öber-e*

エジンと（その）妃，子息たち（及び）その他の

6 *qadayatan labar-ıyan::*

重要人物たちとともに。

7 *Čayadai ejen qatun köbegüd über-e*

チャガダイ・エジンと（その）妃，子息たち（及び）その他の

p 236

1 *qadayatan labar-ıyan::*

41) Rintchen は、これに「黄金家族の（ための乳を）振りまく儀礼 (*altan uruy-un sačuli*)」というタイトルをつけている。これは、ジャムツァラーノが収集した段階でまちがったタイトルをつけたのか、それともリンチンが整理したときのミスか、或いは編集者の問題かは分からない。リンチンが公開したテキストはディリコフの『金冊』とまったく同一であるといってもいいくらいで、ただときおり転写上の差異がみられるだけである。リンチンが「黄金家族の（ための）振りまき」として公開したテキストの最後には、乳を振りまく儀礼、ウマの背中に酒杯を載せて占いをする儀礼に関する内容がつづいている。詳細に検討すると、占いに関する5行ほどの内容は、そのあとにつづくつぎの文書と内容上一致していることが分かる [RINTCHEN 1959: 84–87]。リンチンのテキストにみられるミスを、セールイスも気づいている。セールイスは、モスタールト (Mostaert) がジュンガル旗から収集したテキストを公開した際、そのうちの (A) 文書 *miliyayud-un öčig* (ほんとうは *miliyayud*) が、リンチンの「白い群れの振りまき (*čayan süriğ sačuli yosun*)」と類似していることに注目している [SERRUYS 1984: 30]。

42) 「ボルテ・ジュシン妃」という表現は『明鏡』 (*gegen toli*) にもみられる。ただし、『明鏡』では *yüsin* としている [SONOM 1995: 196, 203]。

43) Rintchen は *jiraqučiy* としている。

重要人物たちとともに。

2 *Ögedei qayan qatun köbegöd öber-e*

オゴタイ・ハーンと（その）妃，子息たち（及び）その他の

3 *qadayatan labar-iyān::*

重要人物たちとともに。

4 *Toloi ejen Isi qatun köbegüd*

トロイ・エジンとイシ妃<sup>44)</sup>，子息たちと

5 *öber-e qadayatan labar-iyān::*

その他の重要人物たちとともに。

6 *Yisüi qatun oru sayuysabar edegü<sup>45)</sup> ireküder*

イエスウイ妃が席についてこれらの人たちと来るときに

7 *öber-e qadayatan labar-iyān::*

その他の重要人物たちとともに。

p 237

1 *Güyüg qayan qatun köbegüd öber-e*

グユク・ハーンと（その）妃，子息たち，その他の

2 *qadayatan labar-iyān<sup>46)</sup> ::*

重要人物たちとともに。

3 *Möngke qayan qatun köbegüd öber-e*

ムンケ・ハーンと（その）妃，子息たち，その他の

4 *qadayatan labar-iyān::*

重要人物たちとともに。

5 *Qubilai seçen qayan Čambui qatun*

フビライ・セチェン・ハーンとチャムブイ妃，

6 *köbegüd öber-e qadayatan labar-iyān::*

子息たち，その他の重要人物たちとともに。

7 *Čingkim gögečin Qoyan Quytai öber-e*

チンキム・クケチン，コカン，ククタイその他の

p 238

1 *qadayatan labar-iyān::*

重要人物たちとともに。

2 *öljei-tü Toyān temür qayan qatun*

ウルジイト・トゴン・テムール・ハーンと妃

44) トロイ・エジンの妃ソルカクタニを祭った祭殿はオルドスのエジン・ホロー旗領内にあった。詳しくは Qurča (bilig) [1990, 1992a, 1992b] 参照。

45) Rintchen は *edkü* としている。

46) Rintchen のテキストには *iyān* が欠如している。

- 3 *köbegüd öber-e qadayatan labar-iyen*::  
子息たち, その他の重要人物たちとともに。
- 4 *Toyun temür qayan qatun köbegüd leber-iyen*<sup>47)</sup> ::  
トクン・テムール・ハーンと妃, 子息たちとともに。
- 5 *Mangyila ejen qatun labar-iyen*::  
マンギラ・エジンと妃とともに。
- 6 *Darmala ejen Daqui qatun labar-iyen*::  
ダルマラ・エジンとダクイ妃とともに。
- 7 *Kamala ejen qatun köbegüd öber-e*  
カマラ・エジンと妃, 子息たちと, その他の
- 8 *qadayatan labar-iyen*::  
重要人物たちとともに。

p 239

- 1 *Ĵiyun Temür qayan qatun köbegüd leber*  
ジクン・テムール・ハーンと妃, 子息たちとともに
- 2 *Nomuqan ejen qatun köbegüd öber-e*  
ノムハン・エジンと妃, 子息たちとその他の
- 3 *qadayatan labar-iyen*::  
重要人物たちとともに。
- 4 *Dorji ejen qatun köbegüd öber-e qadayatan labar*::  
ドルジ・エジンと妃, 子息たちとその他の重要人物たちとともに。
- 5 *Tölügen babaqan Ĵedegen aldarma Taltarbuq-a*  
トルケン・バーバハン, ジェテケン・アルダルマ, タタール・ブハ
- 6 *Ulayçin Tarsaq-a öber-e qadayatan labar*::  
ウラークチン・タルスハ, その他の重要人物たちとともに。
- 7 *Qušilai qayan qatun labar*::  
クシライ・ハーンと妃とともに。
- 8 *Qodutubala*<sup>48)</sup> *qayan qatun labar*::  
クドトバラ・ハーンと妃とともに。

p 240

- 1 *Ayudarm-a qayan qatun labar*::  
アユダルマ・ハーンと妃とともに。
- 2 *Erinçimel qayan qatun labar*::  
エリンチメル・ハーンと妃とともに。

47) Rintchen のテキストにはこの一行が欠落している。

48) Rintchen は *Qutuytubala* としている。

- 3 *Čögčün qatun-a: Aduyun qatun-a:*  
 チュクチン妃に, アドーン妃に
- 4 *Binan<sup>49)</sup> Quldui qatun-a: Borolun Tegülün*  
 ビナン・クルドイ妃に, ボロルン・テウルン
- 5 *Möngčer Quraytu Uyani Čayačin öber-e*  
 ムンチル, クラクト, ウヤニ・チャガチンとその他の
- 6 *qadayatan labar::*  
 重要人物たちとともに。
- 7 *Öljei Temür qayan qatun laban::*  
 ウルジ・テムール・ハーンと妃とともに。

p 241

- 1 *Engke qayan qatun laban::*  
 エンケ・ハーンと妃とともに。
- 2 *Labai qayan qatun laban::*  
 ラバイ・ハーンと妃とともに。
- 3 *Oyiraddai qayan qatun laban::*  
 オイラトダイ・ハーンと妃とともに。
- 4 *Usqal qayan qatun laban::*  
 ウスハル・ハーンと妃とともに。
- 5 *Güntemür qayan qatun laban::*  
 グンテムール・ハーンと妃とともに。
- 6 *Talbai qayan qatun laban::*  
 タルバイ・ハーンと妃とともに。
- 7 *Öljei-tü qayan qatun laban::*  
 ウルジイト・ハーンと妃とともに。

p 242

- 1 *Ürügtemür qayan qatun laban::*  
 ウルクテムール・ハーンと妃とともに。
- 2 *Adai qayan qatun köbegüd*  
 アダイ・ハーンと妃, 子息たち
- 3 *öber-e qadayatan labar::*  
 その他の重要人物たちとともに。
- 4 *Toytubuq-a qayan qatun köbegüd*  
 トクトブハ・ハーンと妃, 子息たち

---

49) Rintchen は *Buyan* としている。

5 *öber-e qadayatan labar::*

その他の重要人物たちとともに。

6 *Mergürgin qayan qatun labn::*

メルグルギン・ハーンと妃とともに。

7 *Mulan qayan qatun laban::*

ムラン・ハーンと妃とともに。

p 243

1 *Manduyuli qayan qatun laban::*

マンドクリ・ハーンと妃とともに。

2 *Batu Möngke tayan qayan qatun köbegüd*

バトムンク・タヤン・ハーンと妃, 子息たち

3 *öber-e qadayatan labar::*

その他の重要人物たちとともに。

4 *Barsabulad qayan Butan qatun köbegüd*

バラス・ブルト・ハーンとブタン妃, 子息たち

5 *öber-e qadayatan labar::*

その他の重要人物たちとともに。

6 *Bodi qayan qatun laban::*

ボディ・ハーンと妃とともに。

7 *Gün bilig jinong Altan qatun*

グン・ビリク・ジノンとアルタン妃

p 244

1 *öber-ün köbegüd leben::*

自らの子息たちとともに。

2 *Darayisun qayan qatun köbegüd leben::*

ダライソン・ハーンと妃, 子息たちとともに。

3 *Noyandar-a jinong qatun laban::*

ノヤンダラ・ジノンと妃とともに。

4 *Buyan Bayatur qong tayiji qatun laban::*

ブヤン・バートル・ホン・タイジと妃とともに。

5 *Altan qayan Noyanču qatun laban::*

アルタン・ハーンとノヤンチュ<sub>ョ</sub>妃とともに。

6 *Bosoy-tu jinong qayan Jüngkin*

ボショクト・ジノン・ハーンとジュンキン

7 *qatun laban::*

妃とともに。

p 245

1 *Erdeni Sereng jinong: Rinčen jinong:*

エルデニ・セレン・ジノン, リンチン・ジノン

2 *Toba jinong: Čoyila qong*

トバ・ジノン, チョイラ・ホン

3 *tayiji qatun labar::*

・タイジと妃とともに。

4 *gürü qoşoi čin vang qatun labar::*

グル・ホセイ・チン・ワンと妃とともに。

5 *Batu tayiji: Čoytu tayiji:*

バト・タイジ, チョクト・タイジ

6 *Qorumši tayiji qatun öber-e*

クルムシ・タイジと妃, その他の

7 *qadayan labar-iyar::*

重要人物たちとともに。

p 246

1 ……<sup>50)</sup> *törü-yin giyön vang qatun labar::*

国の郡王……と妃とともに。

2 *Sayba<sup>51)</sup> törü-yin giyön vang qatun labar::*

サクワ (という), 国の郡王と妃とともに。

3 *Rasibančoor<sup>52)</sup> törü-yin giyön vang qatun labar::*

ラシバンチュール国の郡王と妃とともに。

4 *Rašisereng tusalayči tayiji:*

ラシセレン協理タイジ

5 *Güngzang tayiji: Gümüten<sup>53)</sup> tayiji:*

グンザン・タイジ, グムテン・タイジ

p 247

1 *Segjimdorji<sup>54)</sup> tayiji: Sausa<sup>55)</sup> tayiji:*

セクジムドルジ・タイジ, サウサ・タイジ

2 *Danzan<sup>56)</sup> tusalayči tayiji:*

50) Rintchen のテキストではこの箇所に *Donduy* とある。

51) Rintchen のテキストでは *Sebay* としている。

52) Rintchen のテキストでは *Rasibanjur* としている。

53) Rintchen のテキストでは *Güncen, Gumčoy* としている。

54) Rintchen のテキストでは *Sangjumdorji* としている。

55) Rintchen のテキストでは *Seüken* としている。

56) Rintchen のテキストでは *Dancin* としている。



ダンザン協理タイジ (と)

3 *qatun öber-e*

妃, その他の

4 *qadayatan labar-iyar::*

重要人物たちとともに。

p 248

1 *aq-a qatun-a al qongγur*

兄に, 妃に, 赤くて清らかな

2 *ünen-i sonosqu soluba-a<sup>57)</sup> üjekü*

真実を聞き, ソルバをみる

3 *ünen boluysan Qoyuyčın emegen-e*

真実となったホーチン老婆に

4 *doloyan geseg jėgün eteged*

7つの部分を東側に

5 *telbijü ögtügei::*

置いてあげよう。

6 *buruyu saran-a: buruyu naran-a:*

反対の月に, 反対の日に

7 *deger-e aq-a öljei ten dour-a*

上に兄にウルジイがあるように, 下に

p 249

1 *degüü öljei ten::*

弟にウルジイがあるように。

2 *yurban yisün gešigün ügei*

3の9(27)の傷のない

3 *modun-iyar ergineglejü telbin*

たきぎで山積みにしておいて

4 *tületügei::*

燃やそう。

[ДЫЛЫКОВ 1958: 235-249]

「堅いもの」の骨は全部燃やし, 剥ぎとった肉は持ちかえって7旗の継承人たちに渡す。オトク・ユルールチ職とダルハン・カーは先に帰るが, ガルチは火が完全に消えるまで居残る。帰る際もオトク・ユルールチ職はフェルトのうえからウマに飛び乗

57) Rintchen のテキストでは *solungy-a* としている。

る。帰る途中、「ガリルの谷」の方へふりかえってはならない。一行はまた「ガリルの歌」(*yarliy-un dayu*)を歌う。バダマが現在覚えているのはつぎのようなものであるが語義は不明である。

*erli jaqu, yilili jaqu, erlei erlei*……

サインジャラガルとシャラルダイはつぎのようなことばを記している。

*Ĵa!elili jaqu, erdem jüküi jaqu, örlei! örlei!*

[SAYINĴIRĴAL & ŠARALDAI 1983: 139–140]

この「ガリルの歌」も一般の参拝客は、つとめて聞かないようにする。オトク・ユルルールチ職は八白宮に戻り、『金冊』をもとの箱に納め、ガリル祭は終了する。

### 4.3 未完の文書にみる埋葬儀礼の要素

4.2.3で触れたガリル祭に関するジャムツァラーノの文書には、ひきつづきつぎのような内容がある。

……丸煮をヤムタン(ダルハト)が取って、《ガリルの書》を使って願いをこめて燃やす。帰ってきて《大恩賜》(*yeke tügel*)を食べる。ユルルールチ職が炉を掃除して点検する。福を招く。火のついた棒(*šilegebür*)を手にして出発し後ろをふりむいてはいけない。(ウマを)飛ばして帰ってくる際、熟成させた食べ物を持っていく人はその食べ物を食べる必要がある。つぎに、ハーンのジノンは、太陽が昇る前にジュゲスを観察するチャライチ<sup>58)</sup>二人に、ハイマツ2、酒2を持ってきて、主(チンギス・ハーン)の前に叩頭して座る。トゥール(職のダルハト)が来て香を捧げるよう命じる。《タイジたちがついてきて献香するよう》と呼ぶ。献香してから《3つの歌》を歌う。(その間)数人のタイジたちは供物を捧げることをつづける。その後は(ヒツジの肉の)部位を観察するとき、ユルルールチ職はつぎのように願いをいう。……(以下略) [RINTCHEN 1959: 87]

上述の「熟成させた食べ物」の実体は不明であるが、オルドス・モンゴル人が陰暦11月29日におこなう祖先祭祀の供物トゥリシも、必ず「熟成した食べ物」からなっている。「ガリルの書」とは、おそらく『金冊』のことであろう。「大恩賜を食べる」とは、「祖先の恩賜」すなわち「堅いもの」の供物から剥ぎとった肉であろうと私は推定している。ガリル祭から八白宮にもどる際に「ふりむいてはならない」ことと、「ウマを飛ばす」ことなどの要領をいまでもダルハトたちは堅く守っている。ハルヴァに

58) セールイスはチャライチを漢語の「相面的」すなわち観相家と訳している [SERRUYS 1984: 48]。

よると、シベリアのすべての民族は埋葬地からの帰り道に特別の注意をはらう。野辺の送りに関わった者は、死者の魂がついて来ないようになどの理由から、帰り道ふりむいてはならない。また、チュルク系のカザフ族は、ウマから落ちるほどの早さで埋葬地から帰る [ハルヴァ 1991: 262-263, 275]。ガリル祭の一行がふりむかない点は、シベリアなど北アジア諸民族の埋葬儀礼を倣わせる。

陰暦12月29日の祖先祭祀では、供物トゥリンを燃やす。それによって供物の匂いケンシュー (*kengšigüü*) があの世の祖先に届くように祈願する<sup>59)</sup>。これに対し、ガリル祭では、あえてこの世の日常に反する行為をすることによって、あの世とこの世とを自由に行き来し、供物を直接あの世に住む祖先のもとに届けて戻ってくるという演出をする。つまり、一般のひとは、あの世との交流は不可能であるが、ボルジギン一族だけはそれが可能であるという演出によって、高貴な出自を強調しているのである。一度あの世に近づくことのできたオトク・ユルールチ職とダルハン・カーは、今度は「この世」にもどるための手続きをとっていると理解できよう。

## 5 おわりに

以上、現段階で入手可能な文書資料と、実際に祭祀活動にたずさわっていた祭祀者ダルハトたちからの情報にもとづいて、清朝時代から中華民国にかけてのトロイ・エジン祭祀の実状、祭祀者ダルハトの社会構造、そしてとくにトロイ・エジン祭祀と八白宮との関連性を中心に、再構築を試みた。その結果、明らかにすることができた点と、それに依拠した仮説はつぎの通りである。

まず、明らかにすることができたのは以下の通りである。

### 5.1 末子トロイ・エジン祭祀と八白宮との関連

第一、トロイ・エジンの祭祀は、チンギス・ハーンの八白宮祭祀との共通性が極めて高い。トロイ・エジン祭祀のダルハトは、チンギス・ハーンの「五百戸の黄色いダルハト」と職掌名や組織が酷似している。その意味で、トロイ・エジン祭祀は、八白宮祭祀の縮小版であるかのようなイメージを払拭できない。また、トロイ・エジン祭祀の理論的根拠は、八白宮祭祀と同様、『十善白史』に求めることができる。トロイ・エジン祭祀は、突出した名門集団の祖先祭祀であることは明白である。

第二、トロイ・エジン祭祀は、単なる八白宮祭祀の縮小版ではない。トロイ・エジ

59) 清水は、火を、自然物と人間との媒介・接点の表象であるとする [清水 1974: 33-34]。

ン祭殿とトロイ・エジンを祭るダルハトには、さらに別の、より重要な義務が与えられていた。末子が一族の歴代祖先を祭るという義務を、トロイ・エジンが、そしてトロイ・エジンの死後はかれを祭るダルハトたちが、継承したにちがいない。

第三、末子トロイ・エジンのダルハトが、末子の義務を果たそうと演出するのが、ガリル祭である。ガリル祭の目的は、チンギス・ハーンなど歴代大ハーンを輩出したボルジギンという名門集団の諸祖先を祭ることである。祖先祭祀であるところのガリル祭には、複数の儀礼の要素が内包されている。拝火儀礼、狩猟儀礼、再生儀礼、豊饒儀礼など、そして当然のことながら、古くからの埋葬儀礼と祖先崇拜の儀礼も確認できる。複数の儀礼から構築されているガリルという祖先祭祀は、ボルジギンという名門集団がほかの父系親族集団とは異なる、特権集団であることを表している。ガリル祭は八白宮祭祀の一環ではないにもかかわらず、モンゴルのもっとも神聖な場所、八白宮を選んで実施されている。神聖な場所において、反日常を演出し、高貴を誇示するのである。

ガリル祭について、下記の2点については不明であり、今後の課題としたい。

第一、ガリルということばそのものの意味は、未解決である。オルドス・モンゴルの長老、民俗学者たちから、古代チュルク語、チベット語もしくはサンスクリット語であろうとの説明を受けたことがある。ガリルは、ガル（火）でもガルル（*yarul* 出自）でもなく、なにか特殊な意味があるのであろう。

第二、ガリル祭の対象、すなわちボルジギン一族の歴代祖先の名を記した『金書』の問題である。本稿で私が使用したディリコフの『金書』では、ボルジギン一族の祖先は、チンギス・ハーンから始まっている。『モンゴル秘史』にみられるイエスゲイ以前の諸祖先の名はない。そして、チンギス・ハーン以降の歴代大ハーンの名前も欠落している部分がある。これは、意識的になんらかの政治判断で削除したのか、社会変動のなかで紛失したのかは、不明である。その糸口として、『蒙古源流』など歴史文献にみられる大ハーンの系統と『金書』の人名を比較する必要もある。

## 5.2 祖先祭祀の重層的構造

祖先祭祀の複雑な構造を解明するためには、従来の祖先祭祀研究およびその関連研究をいま一度整理する必要がある。

### 5.2.1 ガタギン一族の祖先祭祀

モンゴルの祖先祭祀に関する従来の研究のなかで、筆頭にあげられるのはホルチャ

バートル (Qurčabayatur) の『ガタギン十三アター・テングリー<sup>60</sup> 祭 (Qatayin Arban Gurban Atay-a Tengri-yin Tayily-a)』である [QURČABAĞATUR 1992; 小長谷 1989b: 139-149]。これは、現在オルドス・ウーシン旗に居住するガタギン一族 (Qatayin oboy) が維持している祭祀に関する、実地調査にもとづく研究成果である。

ガタギン一族の人びとは、『モンゴル秘史』にみられるチンギス・ハーンの8代前の祖先にあたるボドンチャルという人物の兄ブグ・ガタギの末裔であるというアイデンティティを堅持している。チンギス・ハーンを生んだボルジギン一族は「ハーン一族」(qad oboytan) と自称する。ガタギン一族とボルジギン一族とは、「兄弟関係にある父系親族集団」(aq-a degüü-yin oboytan) という共通の出自意識を互いに確認しあっているものの、一般的には、ガタギン一族はいわば傍系集団であるというのが定説になっている。

ブグ・ガタギを祖先とするガタギン一族の人びとによって維持されてきた家神祭を、ホルチャバートルは「ハーン一族の十三アター・テングリー祭」(qad-un ger-ün arban yurban atay-a tengri-yin tayily-a) と位置づけている。チンギス・ハーン一族の祖先祭祀を研究するためには、傍系集団ガタギン一族の家神祭研究は大きな啓発となる。以下ではホルチャバートルの説を詳しく検討してみることにしたい。

ホルチャバートルによると、本来「ハーン一族の家神祭」(qad-un ger-ün tayily-a) は、モンゴルの名門集団のひとつ、ボルジギン一族のボドンチャルが主宰していた家神祭で、それをジュゲリ (jügelı) 祭という。ジュゲリ祭とは、「祖先の地」(yekes-ün yajar) と呼ばれる特別な場所においてジュルト (jüldü) という供物を木から掲げ、全父系親族集団の成員が集まり、みずからの出自、祖先とのつながりを確認する祭であるという [QURČABAĞATUR 1992: 4-6]。

ホルチャバートルは、ジュゲリという、古くからみられることばは、祖先祭祀 (degedüs-ün takily-a) を意味する概念であり、チンギス・ハーンが全モンゴルの各父系親族集団を統一する以前の段階では、個々の父系親族集団内に存在していたと主張している [QURČABAĞATUR 1992: 6-8]。「ジュゲリ祭=祖先祭祀」と定義したうえで、このジュゲリ祭こそハーン一族の家神祭であると、さらに一步議論を前進させている。ここで、ホルチャバートルの視点はチンギス・ハーンによるモンゴル族の統一に向けられている。本来はモンゴルの各父系親族集団内にあったとされる祖先祭祀が、モンゴルの統一にともない、とくに文字の使用など文化的統合が進むにつれ、チンギス・

60) アター (atay-a) とは「嫉妬」の意味で、アター・テングリーとは、「嫉妬天」に相当するとの説明を現地を受けたことがある。

ハーンを新たな祖先とする「黄金オルドの祭祀」(*altan ordun-u tayily-a*)が制度化され、これが全民族の祖先祭祀へと変容し、定着したという。政治的統合により、個々の父系親族集団内にあったジュゲリ祭だけでなく、チンギス・ハーンを生んだ、名門ボルジギン一族のジュゲリ祭まで姿を消すことになったという [QURČABAĠATUR 1992: 8-9]。

ホルチャバートルは、現在でこそガタギン一族の人たちが自分たちの祖先祭祀を「ハーン一族の家神祭」、または「十三アター・テングリー祭」と表現しているものの、中世モンゴル時代ではまぎれもなくジュゲリ祭ということばを使用していた、という解釈をしているといえよう。

ジュゲリ祭に関しては、『モンゴル秘史』などの歴史文献に断片的な記録があるものの、その全容は決して明瞭ではない。ホルチャバートルは『モンゴル秘史』などの文献資料を駆使しながら、みずからの実地調査にもとづいて、ジュゲリ祭の再構築を試みている。それを要約すればつぎのような骨組である [QURČABAĠATUR 1992: 11-20]。

第一、ジュゲリ祭に参加できるのは、血縁上当該父系親族集団の「純粋な成員」と認められる者に限られ、排他的な祭祀であった。また、寡婦や出産直後の女性も排除されていた。ジュゲリ祭からの排除は当該父系親族集団からの追放を意味するものであった。

第二、成員一同が集まって系譜を暗唱し、祖先とのつながりを確認した。現在ガタギン一族の人たちが祭祀のときに一族の系譜をアター・テングリーに報告するのと同じように、『モンゴル秘史』の人物ボドンチャルもまた、一族の系譜を唱えたのであろう。『モンゴル秘史』ではボドンチャルの祖先は「上天よりさだめによって生まれた蒼き狼と牝鹿」であるとしていることから、ボドンチャルもまた一族と天とのつながりを強調したにちがいない。ガタギン一族の人たちは「十三アター・テングリー」をまた「父なる、永遠のハーン・アター・テングリー」(*ečige degedü qan möngke atay-a tengri*)と表現する [QURČABAĠATUR 1992: 67]。これは、アター・テングリーを守護神とし、みずからの祖先とテングリーすなわち天とのつながりを強調した祖先祭祀である。

第三、成員たちは、ジュルトという供物で天を祭った。現在のガタギン一族もまたこの習慣を維持している。チンギス・ハーンの八白宮祭祀においても、ジュルトの使用を確認できる [SERRUYS 1984: 38]。八白宮の祭祀は全モンゴルの政治統合を目的とした祭であり [楊 1995: 27-54]、そこでも、ジュルトが使用されている以上、ジュ

ルトは格式の高い供物であると理解できよう。ホルチャバートルは、ジュルトはおそらく古代チュルク語に起源することばで、のちにダフル族など北アジアの諸民族のあいだに普及していったのであろうと推察している。実態としては、家畜あるいは動物の頭、顎、気管、そして肺臓などがつながったままの形で捧げられる供物である。ジュルトにはたくさんの種類がある。1) 頭と顎、それに気管、肺臓などのそろったものが一種である。2) 頭はなく、顎、それに気管、肝臓、心臓がそろったジュルトを「顎ジュルト」(*erü jüldü*) という。3) 頭と顎がなく、舌と気管、肝臓、心臓、肺臓がそろったのは「舌つきジュルト」(*keletü jüldü*) である。いずれにしても、ジュルトという供物には心臓は欠かせないのである。魂が宿るとされる心臓がついていることから、ジュルトは祖先祭祀におけるもっとも大切な供物だったのである。

第四、供物の一部を祖先祭祀に参加した成員たちが「祖先の恩賜」(*yekes-ün kešig* または *degedüs-ün kešig*) として分配して食べた。

以上がホルチャバートルの学説の要点である。「祖先祭祀＝ジュゲリ祭」との定義はホルチャバートルの説のなかでもっとも貴重な議論である。ガタギン一族が維持している「十三アター・テングリー祭」を祖先祭祀と定義するホルチャバートルの説には、私も賛成する。つぎに、ジュゲリ祭と呼ぶ祖先祭祀の供物ジュルト、ガリル祭と呼ぶ祖先祭祀の供物アマン・クジューについて検討する。

### 5.2.2 祖先祭祀の供物

#### ジュルト

ホルチャバートルが祖先祭祀と定義したジュゲリ祭の供物は、ジュルト (*jüldü*) である。このジュルトについては、小長谷の論考がある。小長谷は、モンゴルにおける家畜の屠殺儀礼に関する論文のなかで、ジュルトについて考察をおこなっている。それによると、食糧供給を主な目的とする定期的屠殺とは異なる、ある特定の意味になった儀礼の際におこなわれる屠殺すなわち「儀礼的屠殺」にはシャマンが関わり、ジュルトが登場する<sup>61)</sup>。

『モンゴル秘史』にみられる記録や、現在なお狩猟を営む一部のモンゴル人のジュルトのあつかい方からみると、ジュルトは野生動物の魂が存在する部分であり、殺害にとともなう再生儀礼の祈りが託される部分である。小長谷の説明では、儀礼的屠殺においては、通常なら腹側から分断して取りだされる内臓を一連のものとしてつながっ

61) 小長谷はズルドと表記しているが、ここではオルドス・モンゴル語の発音でジュルトと表記する。

たままの状態から取り出す点が一般的屠殺との明確な差である、という。ジュルト儀礼において、動物を解体し、内臓をつながったままに取り出す方法は、狩猟における獲物の解体方法と類似している。その意味で、ジュルト儀礼は、本来狩猟に関するものであり、「つながった」ままの状態、すなわち再生のための処理が施されている点にその本質がある。狩猟儀礼にみられる野生動物のための再生手段が、家畜の場合にも、儀礼的な場合にのみ再現されている。家畜の儀礼的屠殺は、狩猟の模倣である。儀礼的屠殺は食糧の入手を目的としているのではなく、祖先や天など超人間的存在への供物の献上を目的としている。これは、聖性が高い行為となり、ジュルトの儀礼も聖性の高い儀礼である、という [小長谷 1991: 318-323]。家畜を野生動物のようにつかひ、供物を格上げしてからジュゲリ祭や八白宮祭祀においても捧げたとみることができよう。

#### アマン・クジュー

チングス・ハーンの末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちによって実施されるガリル祭と呼ぶ祖先祭祀の供物を「堅いもの」という。これは乾燥させた家畜の丸煮である。そのなかでもっとも重要な部分は、アマン・クジュー (*aman küjügüü*) である。ガリル祭では、「堅いもの」のアマン・クジューなどの骨を地面に描いた星印のような紋様のうえにおいて燃やす。この星印の紋様もまたアマン・クジューと呼ばれる。

アマン・クジューとは直訳すれば「口の頸」との意味である。小長谷は、冬から翌春にかけて消費する肉を準備するための定期的屠殺を、「一般的屠殺」と呼び、屠殺に関するモンゴル各地の民族誌、とりわけ屠殺にあたって唱える祝詞にもとづいて論考をおこなっている。小長谷は、この定期的屠殺にあたっての儀礼を「アマン・クジューの儀礼<sup>62)</sup>」と呼んでいる [小長谷 1991: 305-306]。小長谷の説では、「アマン・クジューの儀礼」はまずウシに限定されるという。それは、ウシはおそらくモンゴルにおける集団のアイデンティティをもつ特定の畜産で、ウシにのみ限定するアマン・クジューの儀礼的行為を遂行することによって、ヒツジなどほかの家畜の屠殺が許可されるという構造を生み出すものである、と解釈している。家畜の屠殺も超人間的存在の許可が必要で、殺害の許可度が小さいという意味で、地位の高い特定種が選ばれていることになる。

62) 小長谷はアマンフズーと表記している。ここではやはりオールドス・モンゴル語の発音にしたがい、アマン・クジューとする。



ただし、家畜の場合は、殺害があらかじめ正当化されている点で、狩猟の対象となる野生動物とちがう。モンゴルなど北アジアの狩猟民のあいだで広くみられる死と再生儀礼においては、殺害した動物の骨を破壊しないことが、再生を可能にすると考えられている。家畜の場合は、ひとつの特定の骨、すなわち魂が宿るアマン・クジューが選択されている。アマン・クジューはウシを屠殺した人が食べる。骨をきれいにしゃぶったのち、骨の空洞部に脂肪や草などをつめ、火にくべるなどの儀礼をとる。小長谷は最後に、食糧の準備を目的とする家畜の定期的屠殺における儀礼は、アマン・クジューに集約され、アマン・クジューの儀礼は「再生」を期待する行為であると結論している [小長谷 1991: 305-318]。一般的屠殺におけるアマン・クジューの儀礼では、祝詞や祈禱句を唱えることによって、再生が期待されるのに対して、祖先祭祀など儀礼的屠殺では、ジュルトのあつかいに象徴される行為によって、再生が期待されている。

ジュルトとアマン・クジューはいずれも魂の存在箇所とみなされることになるが、これは、狩猟の対象となる野生動物の魂は内臓にあり、家畜の魂はアマン・クジューに宿る、との解釈が可能となる [小長谷 1991: 328]。

小長谷はその後、別の論文で、つぎのように指摘している。人間が食べるために利用するときには、家畜の聖性を降下させる手続きをとる必要があり、これがアマン・クジューの儀礼である。一方、祖先祭祀など超人間的存在に供物を捧げるときには、家畜を野生動物のようにあつかい、価値を高め、聖性を上昇させることになる、と指摘している [小長谷 1994: 88-89]。小長谷の研究は直接祖先祭祀を論じたものではないものの、ジュルトとアマン・クジューについての指摘は、ホルチャバートルの説をさらに発展させたことになる。祖先祭祀において、本来は再生祈願が託される肉の部分を供物として用いるのは、一族の繁栄を祖先に祈願するものと解釈できる。

### 5.2.3 ハーン一族の祖先祭祀の主宰者

ホルチャバートルの指摘通り、チンギス・ハーンの死後、チンギス・ハーンそのものを崇拜することが強まり、それはまたモンゴルを結束させる唯一の政治思想でもあった。現在まで維持されてきた「黄金オルドの祭祀」もチンギス・ハーン崇拜の一環をなす儀礼である。「黄金オルドの祭祀」は、トロイ・エジン一族出身のフビライ・ハーンの勅命によって制度化されたことを、モンゴル語の歴史資料が語っている [SONOM 1995: 207]。

私は、「黄金オルドの祭祀」と「ハーン一族の祖先祭祀、ジュゲリ祭」とのあいだ

には、大きな質的な差異があったと推察している。モンゴルにおいて、この両者の位置づけが根本的に異なっているのである。ハーン一族の出身で、オルドスのサガン・セチェン・ホン・タイジは、『蒙古源流』のなかで、チンギス・ハーンの死後に設置された八白宮を「総合的守護神」(*yerüngkei-yin šitügen*)と位置づけている。これは「全モンゴルの守護神」であることをいわんとしているのである。

末子以外の男子は与えられた財産のみを継承するが、末子オトゴンは、父祖の財産を受けつぐ。末子はまた「炉の維持者」として、「炉と火の祭」すなわち祖先祭祀を主宰する義務と権利が与えられる。上述の『モンゴル秘史』に登場する、ジュゲリ祭の主宰者ボドンチャルもまた、このような「炉の維持者」であった。

ボドンチャルが主宰していたと思われる祖先祭祀を、誰が継承したかを検討する必要がある。チンギス・ハーンの死後、その末子トロイ・エジンがすべての財産を継承した [拉施特 1986: 380; 松田 1994: 285; 杉山 1992: 141]。モンゴルの末子相続の伝統に則せば、この時点で、ボドンチャルの時代から続いてきた「ハーン一族」のジュゲリ祭もまた末子トロイ・エジンに受けつがれたものと推察できる<sup>63)</sup>。

現在モンゴルでは、祖先祭祀を、イエケス・ウン・タイラカ (*yekes-ün tayily-a*)、デードス・ウン・タイラカ (*degedüs-ün tayily-a*) などのようなことばでもって表現するのが一般的である。『モンゴル秘史』に記録があつて、ホルチャバートルの学説にもみられるジュゲリ祭と呼ぶことはない。ジュゲリ祭という表現が『モンゴル秘史』に登場する以上、13世紀ころまでは、祖先祭祀を意味するポピュラーなことばであったろう。しかしそれ以降は、ボルジギンという名門集団内の祖先祭祀、とくにそれを八白宮の近くで、チンギス・ハーン一族の諸祖先を祭るという形で挙行する場合、もっぱら「ガリル」と呼ばれるようになったものではなかろうか。

## 謝 辞

本稿は、1996年6月19日に、国立民族学博物館共同研究会『ユーラシアにおける遊牧民族形成の歴史民族学的研究——チュルクーモンゴル系諸民族の重層性』(小長谷 有紀代表)にて口頭発表した「オルドス・モンゴルの祖先祭祀——トロイ・エジン祭祀と八白宮との関連性から」を大幅に書きなおしたものである。参加者から建設的なコメントをいただくことができた。論

63) チンギス・ハーンの死後、さまざまな政治的要素がからんで、トロイ・エジンはハーン位につくことはできなかったが、それがかえってトロイ・エジン一門の人望を高めたことは、多くの歴史家に指摘されている。このような政治的な要因が、元朝の創立者フビライ・ハーンの誕生をも促した [杉山 1992: 137-189]。

文を作成するにあたり、国立民族学博物館の清水昭俊教授、佐々木史郎助教授より貴重なご教示を賜った。また、トロイ・エジンの祭祀者であったバダマ老とウルグン・ダライより貴重な情報を得ることができた。併せて感謝の意を表したい。

## 文 献

BOU ŠAN, E.

1991 *Šinilam-a-yin Čiqula Üile Yabudal-un Tobčiyān* (モンゴル文：『シニ・ラマ年譜紀要』, 鄂爾多斯文化遺産 6). 東勝：鄂爾多斯報社印刷廠。

CHABROS, K.

1992 *Beckoning Fortune (A Study of the Mongol Dalalya Ritual)* 117. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

中国人民政治協商會議杭錦旗委員會文史資料研究委員 (編)

1990 『杭錦文史』(第一輯) 東勝：鄂爾多斯報社印刷廠。

ČOGLAYINAMJIL

1984 Takil Toyuyan Irügel. *Ordus-un Soyul-un Öb* (モンゴル文：「祭祀鍋の祝詞」『オルドス文化遺産』) 1: 27-39.

DAMDINSÜRÜNG, Č.

1982 *Mongyol Uran Ĵokiyal-un Degeĵi Ĵayun Bilig Orušibi* (モンゴル文：『モンゴル古代文学百篇』, 第一冊 第二冊). 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

ДЫЛЫКОВ, С. Д.

1958 Эджен-Хоро. *Филология Иистория Монгольских Народов*, Москва, pp. 228-274.

額爾登泰・烏雲達賚・阿薩拉岡

1980 『「蒙古秘史」詞匯選釈』 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

ELDENGTEI & ARDAĴAB

1986 *Mongyol-un Niyuča Tobčiyān—Seyiregüülül Tayilburi* (モンゴル文：『モンゴル秘史還原注釈』). 呼和浩特：内蒙古教育出版社。

ハルヴァ・ウノ

1991(1989) 『シャマニズム』 田中克彦訳 東京：三省堂。

井上 治

1991 「《ツァガン・トゥーフ》の写本評価について」『文学研究科紀要別冊一八集』早稲田大学大学院文学研究科, pp. 71-83.

1992 「《チャガン・テウケ》の2つの系統」『東洋学報』73(3.4): 1-24.

ЖАМЦАРАНО, Ц.

1961 *Культ Чингиса в Ордоце. Central Asiatic Journal*, Vol VI, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 194-234.

珠榮嘎

1991 『阿勒坦汗伝』(訳注) 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

小長谷(利光)有紀

1989a 「ヒツジに託す願い——モンゴル族, 春のチンギス・ハーン祭典」『季刊民族学』48: 36-46.

1989b 「ホルツバータル『哈騰根十三家神祭祀』」(書評)『史林』72(2): 139-149.

1991 「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会, pp. 303-333.

1994 「狩猟と遊牧をつなぐ動物資源観」『資源への文化適応——自然との共存のエコロジー』(講座地球に生きる3), pp. 69-92.

LIU ĴINSUO (整理注釈)

1981 *Arban Buyantu Nom-un Čayan Teüke* (モンゴル文：『十善福白史冊』). 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

松田孝一

1994 「トゥルイ家のハンガイの遊牧地」『立命館文学』537: 285-304。

森川哲雄

1973 「オールドス・十二オトク考」『東洋史研究』32(3): 32-60。

MOSTAERT, A.

1934 *Ordosica*. Bulletin of the Catholic University of Peking.

1941 *Dictionnaire Ordos* (A-I). The Catholic University Peking.

1942 *Dictionnaire Ordos* (J-Z). The Catholic University Peking.

1956 *Erdeni-yin Tobči* (Introduction), Mongolian Chronicle by Sayn Sečen. part I, Harvard-yenchin Institute Scripta Mongolica II, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

NAMJILDORJI

1992 *Ordus Ĵang Üile-yin Tobči* (モンゴル文: 『オールドス風俗鑑』). 海拉爾: 内蒙古文化出版社。

NARASUN, S.

1989 *Ordus-un Ĵang Ayali* (モンゴル文: 『オールドス風俗誌』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

NARASUN, S. & ERDEMTÜ (編)

1985 『成吉思汗八白室』第一輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

1986a 『成吉思汗八白室』第二輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

1986b 『成吉思汗八白室』第四輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

1987a 『成吉思汗八白室』第三輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

1987b 『成吉思汗八白室』第五輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

1987c 『成吉思汗八白室』第六輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

1987d 『成吉思汗八白室』第七輯 内蒙古伊克昭盟檔案館。

ODUNČEČEG

1987 *Ordus Doluyan Qošiyn-u Vang-un Üye Ĵalyamji-yin Temdeglel* (モンゴル文: 「オールドス七旗旗王の系譜」). 『伊克昭盟文史資料』4: 189-213。

QASBILIGTU

1984 *Ordus-un Qorim* (モンゴル文: 『オールドス婚礼』). 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

QURČABAĴATUR, S.

1991 *Mongyol-un Böke Mörgül-ün Tayily-a Takily-a-yin Soyul* (モンゴル文: 『モンゴル族シャマニズム祭祀文化』). 海拉爾: 内蒙古文化出版社。

1992(1990) *Qatayin Arban Gurban Atay-a Tengri-yin Tayily-a* (モンゴル文: 『ガタギン十三アター・テングリー祭』). 海拉爾: 内蒙古文化出版社。

QURČA (BILIG), N.

1990 *Eši Qatun Qoruy-a Kiged Tegün-ü Egüsül Ularilta* (モンゴル文: 「イシ・ガトン・ホローの起源と変遷」). 『蒙古学』4: 71-78。

1992a *Eši Qatun Šitügen Kiged Tegün-ü Takily-a-yin Učir* (モンゴル文: 「守護神イシ・ガトン及びその祭祀状況」). 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 1: 91-100。

1992b *Eši Qatun-u Ner-e-yin Tuqai* (モンゴル文: 「イシ・ガトンの名前について」). 『昭烏達蒙古族師範專科学学校学報』2: 22-24。

1993 *Yamu Gedeg Üge-yi Yayakiju Oyilayabal Ĵokiqu Bui* (モンゴル文: 「ヤムということばを如何に理解すべきか」). 『蒙古語文』2: 62-64。

1994 *Erten-ü Mongyol-un Yamu Tügegekü Yosun-u Tuqai Angqan-u Sudulul* (モンゴル文: 「古代モンゴルのヤム分配についての初歩的考察」). 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 3: 40-47。

1995 *Mongyolčud Uyuray Segül Šayantu Čimöge-ber Burqan Takiday-un Učir* (モンゴル文: 「脂肪尾と脛骨で神を祭る理由」). 『蒙古語文』2: 9-14。

拉施特

1985 『史集』(第二卷) 北京: 商務印書館。

1986 『史集』(第一卷, 第二分冊) 北京: 商務印書館。

RINTCHEN, B.

1959 *Les Matériaux pour L'Étude du Chamanisme Mongol* 3. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

SAYINJIRGAL & ŠARALDAI

1983 *Altan Ordun-u Tayily-a* (モンゴル文：『黄金オルドの祭祀』). 北京：民族出版社。

SERRUYS, H.

1984 *The Cult of Cinggis-Qan: A Mongol Manuscript from Ordos. Zentralasiatische Studien* 17, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 29–62.

清水昭俊

1974 「火の民族学」大林太良編『日本古代文化の探究——火』東京：社会思想社，pp. 13–95。

SONOM (編注)

1993 *Mongyočud-un Šigüsü Talbiqu yosun* (モンゴル文：『モンゴル族肉食文化』). 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

1995 *Gegen Toli · Ordus-un Tuqai Temdeglel* (モンゴル文：『明鏡 オルドス記』). 北京：民族出版社。

杉山正明

1992 『大モンゴルの世界』東京：角川書店。

VAN HECKEN, J. L.

1972 *Les Princes Borjigia des Ordos Depuis Leur Soumission aux Mandchoux en 1635 Jusqu'à Leur Disparition en 1951. Central Asiatic Journal*, Vol. XVI, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 132–155.

楊 海英

1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10: 27–54。

1996 「オルドス・モンゴル族オーノス部の家系譜」『関西外国語大学研究論集』63: 667–679。



写真1 トロイ・エジンのダルハトであるバダマ老

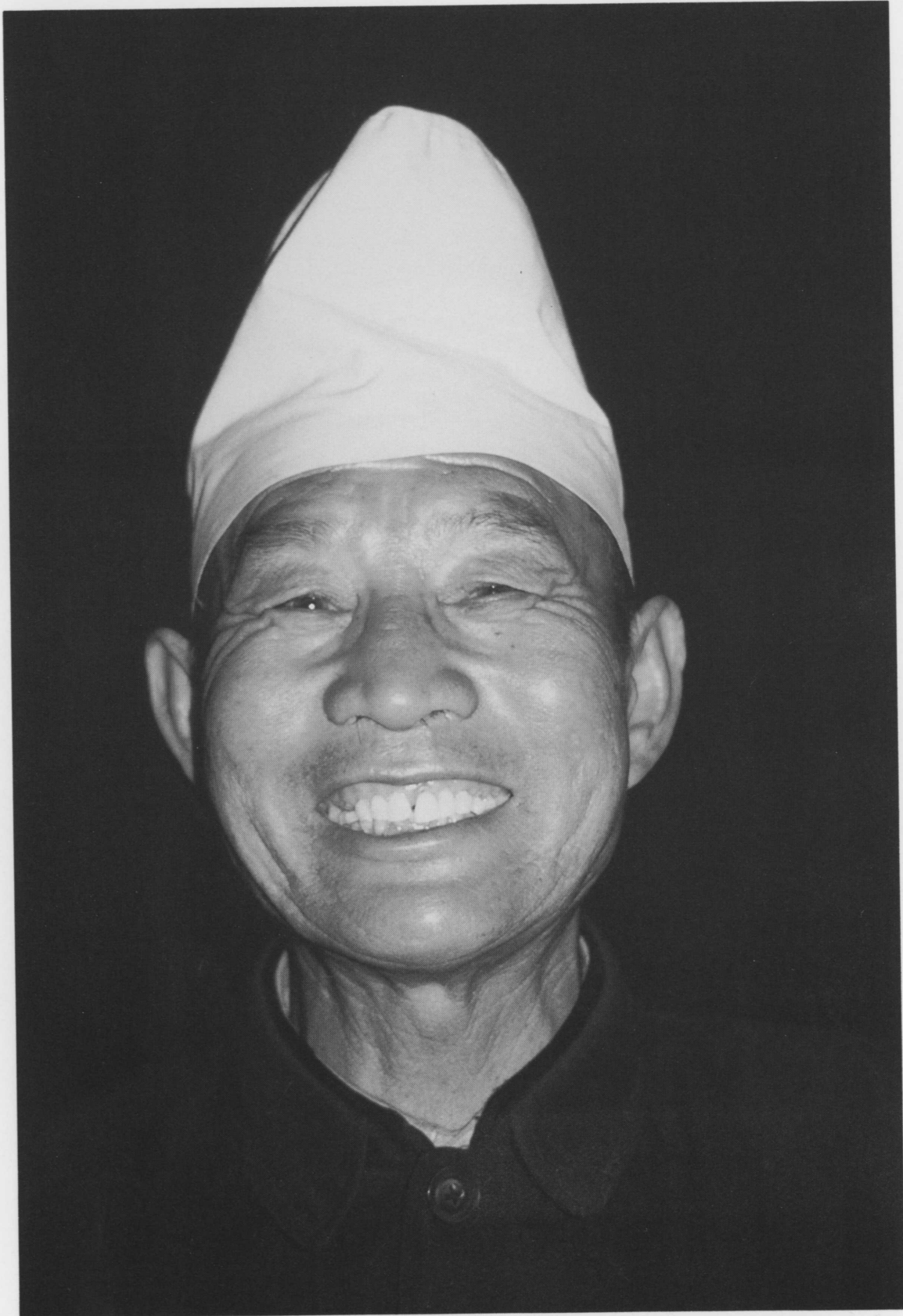


写真2 トロイ・エジンのダルハト：ウルグン・ダライ



写真3 「拝火祭」の供物：ヒツジの胸肉。供物として火の神に捧げるときは、肉を剥ぎ取り、骨だけを燃やす。

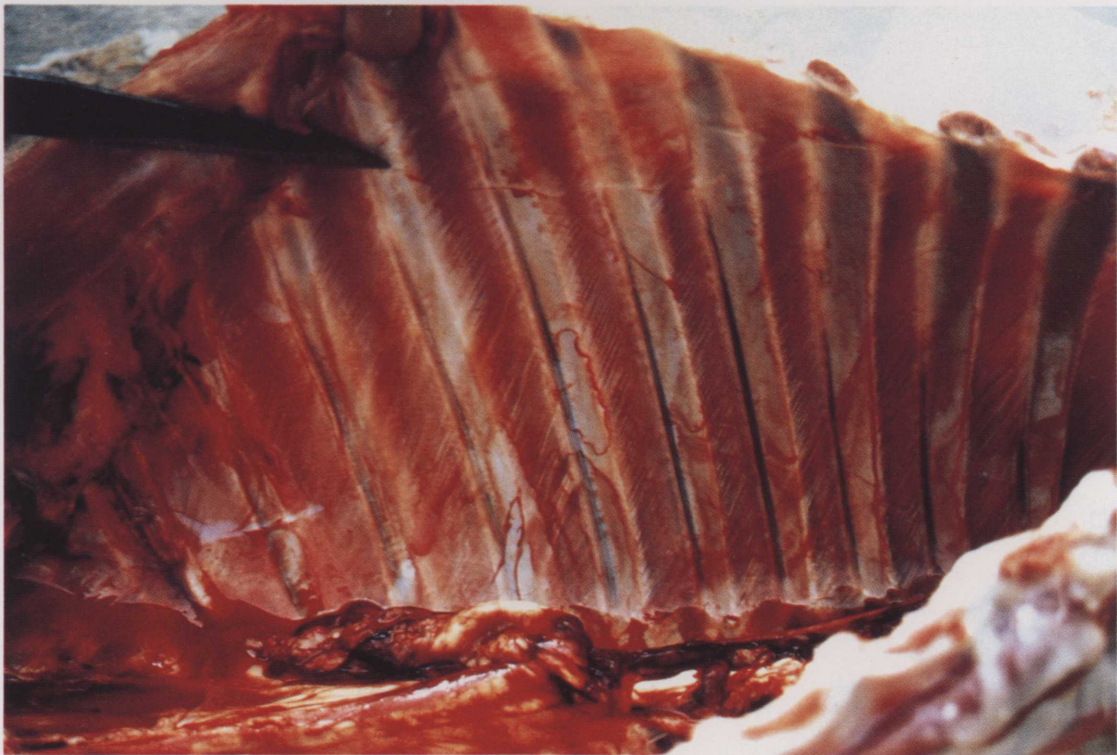


写真4 ヒツジの肋骨。画面中央のもっとも長い4本が「4本の高い肋骨」である。



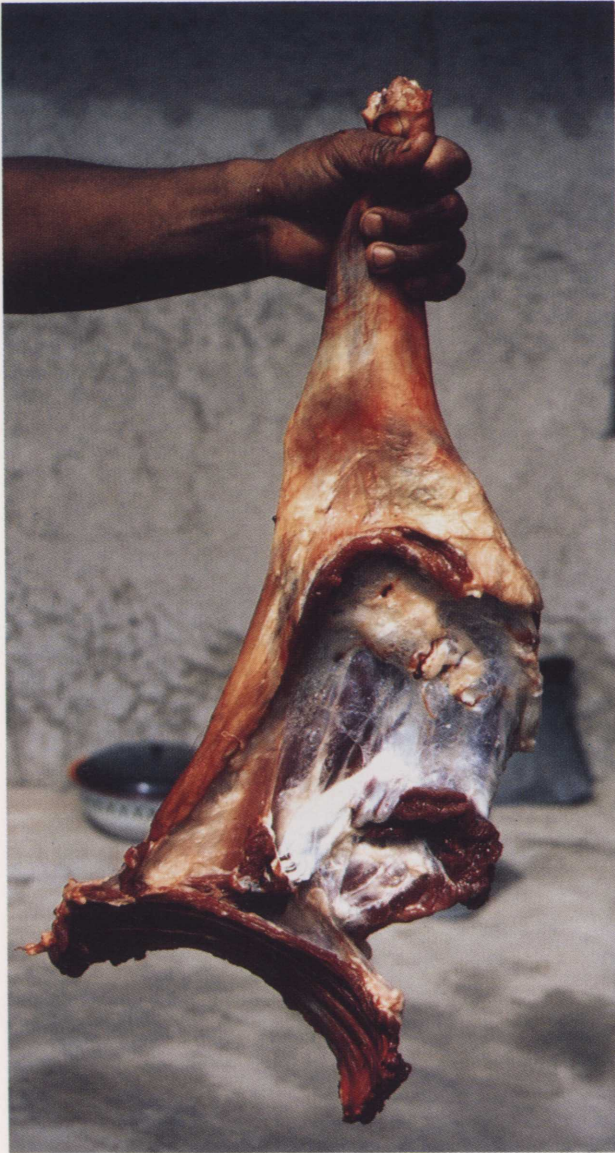


写真5 「完全なハ」



写真6 ヒツジの大腿グヤ